

Ⅸ 【小諸義塾と信州教育】

御一新以来、欧米に追い付き追い越せの近代化と富国強兵を目指し、不平等条約の撤廃に向けた殖産興業政策によって、近代国家の証となる帝国憲法発布をした。明治も三十年代になると、維新後の教育を受けた世代が国民の多数を占め、日清戦争で勝利したことで、国民の意識は大きく変化していた。

その一つが高等教育を求めめる風潮で、小諸義塾に対する周囲の期待でもあった。熊二は基督教指導者として遠祖の地である佐久に移住し、小諸では教育者としての道を歩み始めたが、数を増やすだけの基督教の布教には限界を感じていた。その打開策の一つが森山の果樹栽培であり、中棚鉱泉の開発、ラミー草（漁網の繊維となる植物）植樹等の新しい事業である。

米留学時代のミシガン州ハーランの、学校と教会が一体化した地域で過ごした経験から、信仰と教育に携わる独自の道を目指していた。

当時の熊二の姿を藤村は、聖書の言葉を引用して「先生は播種者ではあるが収穫者ではなかった」と表現している。

熊二と藤村の最初の出会いは明治十九年に熊二が三田共立学校で教鞭を執っていた頃にまで遡る。従来の藤村研究では明治二十一年六月十七日明治学院在学中に高輪教会で洗礼を受けたとされているが「四月二日ヨリ六月三十日の日記別帳に記す」とあるが、この別帳が遺されていないことから藤村の基督教入信に至る詳細は不明である⁽¹⁾。

藤村が小諸義塾に赴任した日付けも明治三十二年四月五日とされているが、熊二の日記は三十年二月一日から三十二年十二月三十一日までが遺されていないため、この間の藤村との関係を熊二の資料から知る事ができない。

藤村は明治女学校で教師を勤め、其の後若手の詩人として注目を集めていたが小諸を訪れる直前に、理由はわからないが基督教を棄教している。

再婚して基督教徒としての教育者を目指す熊二と、棄教後も熊二の下で教師を務めた藤村との間で、基督教についてどのような会話がなされたのかは分らない。

二五歳の藤村が小諸の熊二を訪ねて来た時、熊二はすでに五五歳になっていた。

幕末から維新の動乱期に青年期を過ごした熊二の周りにいる若者達は、明治維新後の新しい教育を受けた世代である。その世代で一番身近にいる人物が、妻の隆子であり、島崎藤村であった。

〈信州教育と基督教〉

小諸義塾は創立から十二年後の明治三十九年三月に閉塾している。閉鎖に至った理由の一つに「義塾で基督教は説かない」という取り決めがあったとされているがこの文は熊二の資料には遺されていない。この取り決めを無視した、妻隆子の行動と女子学習舎を併設したことで基督教の学校と誤認されたのが一因とされている。

日記に記されている熊二の一週間を見ると、基督教徒にとって最も大切な安息日である日曜日は講義所（祈祷所）に出かけているが、義塾の授業が行われる平日に講義所を利用した記載はない。

史料を見ても義塾の授業科目に基督教に関するものは無く、義塾が主催した外部講師を招聘した講演会でも基督教に勧誘するような内容は見ることができない。

卒業生で『私立小諸義塾沿革誌』の編集者林勇氏はその著書の中で「私も義塾で学んだ者の感想からすれば義塾ではキリスト教のキの字にも触れなかったことは事実である」と語っている⁽²⁾。義塾は養蚕の繁忙期は授業を休みとしていたので熊二はこの期間に小諸以外の県内各地で宣教活動を行っていた

熊二は南佐久から小諸に転居した直後に南佐久講義所の牧師を東京中会伝導委員会から解任され、身分は日本基督教教会牧師からオランダ改革派宣教師に戻されている。その為中会伝導局からの給与は出なくなり、宣教師としての収入は、オランダ改革派伝導局からの支援金（謝儀）だけになった⁽³⁾。

明治憲法で宗教の自由は認められたが、明治二四年の内村鑑三の不敬事件以来の教育と宗教の衝突問題の影響は大きく日本の基督教試験の時期であった。

三三年頃から二十世紀大伝導として、各派の伝導局^{ミッシンション}は教勢の復興と安定に力を明治入れた。その結果、地方へはカトリックはじめ、プロテスタント各派が浸透していた

長野県内では上田に最初に教会が置かれ、プロテスタントが布教されていたが、北信地方にはプロテスタントの中でも、カナダ系のメソジストによる布教活動が進められていた⁽³⁾。

県内にミッションスクールが設立されていないことは以前にも述べてあるが、明治三二年にカナダ婦人伝導会社が長野市に英和女学校の設立を目指したが、県当局からの許認可が下りず断念した。メソジストは本来、婦人・幼児への布教活動が主力で、長野市内の二ヶ所に無料幼稚園(フリー・キンダーガーデン)設置、貧民層の子供を預かり日曜学校として布教していた。

明治三六年二月に日本メソジスト長野教会(現・日本基督教団長野県町教会)の会堂を園舎とした「旭幼稚園」を開設して県の許認可を得ている。旭幼稚園の成功を伝導の突破口であると認識したカナダ婦人伝導会社は、明治三五年、上田町に梅花幼稚園(現・日本基督教団上田新参町教会)を開設した。

長野県での活動が、伝導の困難な地域では幼稚園経営が宣教の有効な手段であると証明され。メソジストのミッションスクール英和女学校が開校されている地域の東京・静岡・山梨の他に、富山・石川・福井でも幼稚園を設置し、伝導活動を進めた。その結果基督教を学んだ保母の確保が必要となった。

明治三八年九月カナダ婦人伝導会社は上田の梅花保育園を使い保母伝習所を開設していた。地元の人々はこの伝習所を「子守学校」と呼び、初期は殆どが県外からの生徒であったが地元出身で保母を志す女子も現れた。

生徒募集の基準は、「満十八歳以上・高等女学校(四年制)卒業又ハ同等以上ノ学力ヲ有スル者、修業年限二ヶ年」となっていた。教科は女性外国人宣教師の他、小県産業学校々長の三吉米熊(4)と、上田中学の教員が担当していた。

第一回の卒業式には大山長野県知事が祝辞を述べ、学務課長、県主席視学が列席、未認可であったが社会的には認知されていたことが判る。

上田保母伝習所は大正八年に東京市麻布「東洋英和女学校幼稚園師範科」となつて移転され、現在は東洋英和女学院短期大学保育科となっている(5)。

明治三九年内務省のキリスト教信徒調査記録を『基督教週報』が報じている、最も多いのが「長野県の三万三八一九人。以下東京の二万〇〇八九人、北海道、大阪」とある(6)。

明治四二年十二月長野県知事が調査した「神仏道以外ニ属スル宗教信徒報告」では県内の三十の教会と教派の所在地を報告している。県内全域に置かれた教会の、半数近くがメソジスト教会であった(7)。

〈研成義塾と小諸義塾〉

長野県内で基督教の理念を教育の中心に据えた私塾には明治三一年南安曇郡東穂高村(安曇野市)に井口喜源治(8)が開いた「研成義塾」がある(9)。

松本安曇地方は維新時の廃仏毀釈運動が激しい地域で、其の後も基督教に対しては厳しい目が向けられていた。基督教徒で東穂高小学校教師の井口喜源治は公的教育の中に基督教を持ち込んだとして一度は教職を追われていた。

明治三一年に同級生の相馬愛蔵等と結成した東穂高禁酒会の支援を受け、自宅のあった現在地(安曇野市穂高)に、私塾研成義塾を開き、小学校を終了した子女に自由と独立を基にした教育を実践していた。

運営費は月謝と寄付金の他は井口の私財処分により賄われ、経営は困難であったが公費による補助金、教育方針に反する寄付金は一切謝絶していた。

この姿勢は終生変わらず井口が昭和十三年六九歳で死去する迄続けられた。

裁縫以外の教師は井口一人が勤め、「一人の教師が一人の人間を育てる」ことを目指し約八百人の卒業生を送り出した。井口は無教会主義の内村鑑三を敬愛、内村も義塾を訪れ深い理解と高い評価を送っていた。

研成義塾の精神的後援者は内村鑑三で、経済的後援者は新宿中村屋を創業した盟友の相馬愛蔵と妻の黒光であった。

熊二と内村は帰国直後の基督教親睦会、西群馬伝導活動以来の盟友であり、相馬愛蔵とは、廃娯運動で旧知の間柄で、妻の黒光(旧姓星)は熊二が創立した明治女学校の開明的な雰囲気憧れて横浜フェリス女学院から転校、当時講師をしていた島崎藤村の指導も受けていた。

信州教育史の中で同時期に存在した二つの塾の主唱者である木村熊二と井口喜源治が直接に出合ったという記録は遺されていない。

熊二の基督教を敢えて前面に出さない教育方針は、帰国直後に開いた家塾時代と明治女学校創立時から変わっていないが、井口の研成義塾と比べて小諸義塾の基督教に対する教育方針を一部の基督教関係者は、まるで隠れキリシタンの様であったと評している。

小諸義塾が僅十余年にして閉校に追い込まれた要因には、目まぐるしく変わった教育制度が考えられ、熊二を始め指導者達がそれに追いついて行けなかった姿が見える。

〈町立中学への夢〉

明治二八年三月十四日小諸町議会は小諸義塾に対する補助金の出資を決定した。義塾校舎の新築は以前から取り沙汰されていたが、完成したのは明治二九年四月十日であるが校舎の新築に関する詳しい資料は遺されていない⁽¹⁰⁾

日記の日付けと他の資料の期日に違いはみられないが完成に至るまでかなりの紆余曲折があった。

『二八年七月三十一日諸子来学、西岡町長来たりて牧野家地所見分を乞ふ同行三百坪之地所借用する事に決ス(略)』『同年八月三日(略)牧野家所有地借用承認二成りたる由二付西岡同道地所を測量し式百八十坪程受取之事となりたれハ同地所掃除を命せし二付再ひ不都合申候二付断然借用之件断念し鳥居善処氏決意を申送る(略)』

西岡義信は初代町長、鳥居義処は北佐久郡々長でいずれも旧藩士族であった⁽¹¹⁾

校舎の敷地は信越線小諸駅が設けられた城郭地の一部で、開通直後駅舎の増築が計画された為、最初の計画を白紙に戻していたと思われる。

この場所は義塾閉校後に小海線操作場の敷地に含まれ、遺されている史料だけでは正確な場所を特定することはできない。

新校舎建設に対して牧野康強^{やすたけ}(牧野家十一代当主をはじめ小諸町内の資産家、有志から総額八百円の寄付金が集められ、議会は二九年度予算では前年の倍額、二百円の補助金出資を決議している。

当初はお互いが教え合うという雰囲気の家塾であったが明治三十年度には生徒数も五十名を超え、三分の二が近隣町村出身で寄宿生もいた。

学業は予科と本科に分け、九月十六日から十二月二十日を前期。一月十日から四月十三日を後期。日曜祭日の他には五月一日から九月十五日までの農繁期は短縮授業を行い、十二月二十日から一月十日迄休業という義塾規則を定めた。

授業の充実を図るため理学博士鮫島晋⁽¹²⁾が上田から出張し数学を担当し、卒業生の中には師範学校、陸軍士官学校、医学の道を志す若者もいた。

義塾の雰囲気を早稲田大学に進学した平野英一郎氏は『(略)私が入学したのは耳取町に校舎が出来た数年たった頃と覚えているが、その時の生徒は非常に少数で、³学科も英数漢の三科目だけであった。先生一人に生徒三、四人で、純然たる昔風の

私塾であった(略)世間ありふれた学校の様に沢山な科目の詰め込み主義の教育よりは、今でもなんだか懐かしみが多い。(略)併しこの時代は頗る短く、其半年か一年過ぎて、義塾が県庁の認可を得て中学程度の組織に変更されることとなった。(以下略)』と語っている。

明治三二年二月二十七日中学校令・実業学校令が公布され、小諸義塾に対して長野県知事から「私立学校令第359号」の認可が下りたが、其れより前の明治三十一年一月頃から義弟の田口卯吉に対して、学校長また学校の資格に関する文部省の動向を問い合わせていた。

五通ほど遺されている書簡の一つを見ると、島崎藤村を通じて情報を得ていたことも記されている。⁽¹³⁾

一書拝啓仕候秋冷之候益々御健勝奉祝候陳ハ過般

島崎氏来訪之節小室(諸)義塾ヲ中学校ト為スニ付

校長資格ノ事ヲ問合可申候様御伝言有候二付文部省ニ

問合セ候処私立中学校之校長ニハ資格ノ必要無之趣ニ

有之候右及御通知候

木村大兄机下

十月九日

田口卯吉

〈実業教育と学校令〉

新校舎建設への寄付金、義塾へ町費の補助金支給など小諸町の人々の義塾に対する期待は大きいものがあり。有識者の間に義塾を学制に沿った学校に育てようという機運が高まった。

明治三二年文部省の中学校改正令・私立学校令公布と同時に実業学校令も公布され、実業補習学校は北佐久の小諸・岩村田・立科に開設されることが決められ、翌年に上田中学が県立となり、南佐久の野澤には分校が置かれた。

義塾に知事認可が下りた明治三二年の学科課程表には

【本塾は尋常中学校並に実科中学校の学科を斟酌し、及び其程度を短縮し高等小学校を卒業せる生徒の為に来学の便利を与えんとす】とある。

学年は三学年制、学科も十一学科でその中には農学科の週二時間の履修を定め。

【小諸町九二五番地 塾主井出静 校長木村熊二】と登録している⁽¹⁴⁾。

井出静⁽¹⁵⁾は旧小諸藩士族の退役軍人で義塾では漢学と書道を担当していた。

小諸町からの補助に対する監督委員を依頼していたが、小諸で信望の厚い井出を塾主として新たに町立中学校設立に向けた委員会を立ち上げた。

明治三十二年三月十一日の町議会への報告書が遺されている⁽¹⁶⁾。

【報告書】

中学校設立ニ対スル経費及設備費左ノ通調査候間

此段及報告候也 明治三十二年三月

調査委員 小山五左門 井出繁平 柳田五兵衛

伊藤音次 木村熊二 井出静 佐野盛門

調査委員の小山、柳田は町の有力者、井出(繁)は議員、伊藤は役人、佐野は当時の小学校々長、将に官民挙げての体制を作った。

新校舎建築後、町からの補助金支給が決定した。この頃熊二が頼りにしていたのが、塾主の井出静であった。二人は肝胆相照らすという間柄で中棚の開発も二人で行っていた。義塾は二階建講堂の外に、増築を行い(荒町長勝寺の土蔵を移築)生徒の募集広告も出している。

新入学の学生徒も最盛期の明治三四年には六九名となり、教職員数も入れ替わりがあつたが熊二を含め、七名を数えていた。

小諸町からの補助金の他に北佐久郡会からも補助金を受け明治三三年度には三百円に増額された。経営面では決して余裕があつた訳でなく、運営は井出静の手に委ねられていた。

義塾授業内容の充実を図るため、上田から鮫島晋を招いているが、熊二がもう一人頼りにしたのは、島崎藤村であった。

【註】

1 資料⑦P-110

2 資料②P-95

3 資料②『日本キリスト教会』上田教会歴史資料集

4 三吉米熊(みよしよねくみ) 蔓延元年(昭和二年) 教育者、農学博士

長州藩士三吉慎蔵の長男、攻玉社、駒場農学校で農業化学を学び、明治十四年長野県出仕、農務掛として養蚕業に携わり二二年から八・伊を視察明治二五年小県郡立養蚕学校長、上田蚕糸専門学校校長(現信州大繊維学部)を務める

5 資料⑨P-199

6 『望月町史第一編(近代)』第一章(1)望月の明治維新(四)キリスト教 P-97

7 『長野県史・近代史料編 第10巻(一)』宗教 キリスト教(教団・教会) P-902

8 井口喜源治(いぐらきげんじ) 明治三年(昭和十三年)、安曇村穂高宿、「江戸屋」長男

明治二二年旧制長野中学松本支校(現・松本深高校)卒業、明治法律学校で巖本善治内村鑑三から基督教に導かれる。明治二五年松本高等尋常小東穂高高等小教員となるが一部職員から排斥運動を受け退職 同三一年研成義塾を創立、六九歳で死去する迄三十年以上一人で運営している

9 「研成義塾」けんせいぎじゆく 明治31年(昭和13年)長野県南安曇郡東穂高村に開設された私塾。塾主は同村出身の井口喜源治で、村内有力者の協力を得て創立。

明治三四年私立学校認可を得るが、公的支援は受けず、井口の個人資産と、同志からの寄付で運営していた。昭和四四年安曇野市穂高に「井口喜源治記念館」を設立、当時の資料が展示されている。『井口喜源治と研成義塾』(財)井口喜源治記念館刊

10 資料②P-30

11 資料⑦P-237

12 鮫島晋(さめじましん) 嘉永五年(大正六年) 後高田藩旧士族

東京大学卒、東京理科大設立者の一人 明治二一年文部省退官、二八年から小諸義塾教師、閉校後は前橋義塾 広島明道中、大正四年平戸女学校で教鞭をとる。

島崎藤村の『貧しい理学士』のモデルとされている

13 資料②P-43・44

14 同 P-48・49

15. 井出静(いでしずか) 嘉永六年〜明治三十五年 小諸藩士族

明治四年東京鎮台第二分営出仕、同十年陸軍軍曹として西南戦争従軍、二六年陸軍憲兵大尉任官、二八年日清戦争時占領地金州にて退役、病氣療養の為小諸に帰省後、義塾で漢学と書道を担当。熊二の理解者であったが、明治三十五年三月二七日死去している。

16. 資料②P 1-53

《X》 【義塾と小諸の人々】

〈小諸の気風〉

明治二九年十一月七日から二日間の日記を見ると、『島崎春樹來宿関五太夫來訪』

『八日島崎春樹仙台へ帰ル(略)塩川小山某來訪福沢翁歓迎之件を議ス』

『九日福沢翁來諸懷古園(迎へ略)』と記されている(1)

慶応義塾創始者の福沢諭吉が小諸義塾を訪ねた経緯が判るが他に詳しい史料は他には遺されていない。同じ「義塾」(パブリックスクール)という名称を使っているが、福沢と熊二の接点は不明である。

戊辰戦争時福沢諭吉は既に塾を開き、熊二が参加した彰義隊の上野戦争の様子を塾生と一緒に目撃していたという話伝えられている。

天保五年(1834)生まれの福沢は明治二九年頃には西日本を中心に各地を訪れている。その後明治二一年に慶應義塾の一貫教育制度を確立、明治三四年一月に六六歳で死去している。

熊二を小諸に招いた与良町の小山太郎と同族の小山謙吾(文政十二年〜明治二九年)は維新直後から福沢諭吉に私淑していた。福沢の著書に説述意識をつけて近隣に回覧していた。

明治八年小山家の菩提寺である長勝寺に化成学校を開設し、息子の完吾*甥の小山久之*、同族の小山松寿*ヲ教育していた。

小山謙吾の五男、完吾は福沢の小諸訪問の時、慶応義塾在学中であったことから、彼が案内役を務めたと思われる(2)。

江戸中期に与良町から独立した小諸荒町には外国人宣教師が訪れた唐物屋(輸入商品を扱う店)があり小諸で最初に基督教が伝導されていた。

明治学院の教え子で熊二が花と共に訪れた、関友三の実家があるの荒町で、代表的人物には柳田茂十郎*小山久左衛門*がいた。柳田は熊二が小諸で出会った開明的な商人で、小山久左衛門は醸造業・製糸業を営んでいる。二人は熊二の相談相手として、その労を惜しまなかった(3)

江戸末期、小諸領内には大原幽学(4)による性学が実践されていた。八満村の小林葛古* 与良町の小山魯恭>を輩出するなど文化意識の高い地域でもあった。

御影新田村の柏木新三郎の紹介で森山村の塩川伊一郎が熊二の所へ相談に訪れたのも、大原の教えによる、新しい産業への意欲の現れであった。

義塾の生徒には周辺の農村からの入学者も多く、小諸・佐久地方が教育に対する意識が高かったことがわかる。

長野県内で最初の政治結社は小諸市町の石塚重平*が創立した盤鴻社(ばんこうしゃ)で、佐久地域の自由民権運動の拠点であった。

熊二が佐久で早川権弥、立川雲平等と廃娼運動に参加した契機も自由民権運動との関りからで、小諸義塾を育てる土壌をつくっていたともいえる。

荒町の光岳寺では植木枝盛や後藤象二郎が訪れ、演説会を開いていた。義塾立ち上げの際小諸の若者達と話し合いを持った会場も此の光岳寺である(5)。

小諸に住いを構えたのは熊二以外に、囲碁の鈴木善人*能楽師の日向吉次郎*などの文人達もいた。彼らは旧小諸藩との繋がりを伝手に、鉄道開通後の小諸の発展に期待して移住してきていた(6)

熊二が最初に居を構えた佐久の気風に関しては先に述べたが、小諸は慶長年間、仙石秀久による佐久郡領有後、周辺からの「村寄せ」により与良町・本町・市町が作られた。江戸中期から牧野氏の城下町であり北國街道の宿場町としても栄え、維新後には鉄道が開通し、駅が開業したことさらに発展していた。

熊二の日記が明治二九年十二月十日から三十二年十二月三一日迄が遺されていないことから、小諸の人々との様に接していたのかわからない部分も多い。

遺されている他の資料から推測すれば、小諸は、外に対しては先進的行動をとっていても内に向けては旧守的な人も多く、基督教に対しても理解は示すが入信迄には至らず、頑なに拒否する人々がいたことも事実である。

【註】

1 資料⑦ P.261

2 資料⑧参照 『信州人物誌』 信州人物誌刊行会 昭和四八年

* 小山完吾 こやまかんご(明治八年〜昭和三十年 与良町小山謙吾の五男 慶応義塾卒、明治三八年時事新報記者、四四年衆院議員を一期務めるが政界には残らず経済界に転身、明治生命保険取締、時事新報社長に就任、妻は福沢諭吉の孫娘。娘婿の五郎は三井銀行頭取

* 小山久之助 こやまひさのすけ 安政六年〜明治三四年与良町小山敬義の次男

明治十一年、中江兆民の仏学塾で幸徳秋水らと学ぶ、十五年「政理叢談」二一年大阪で「東雲新聞」を発刊、後藤象二郎と国会開設運動に参加、二度の落選から三一年、立川雲平を破り衆院議員当選、兆民の著書「二年有半」の出版に尽力したが病没。次男の亮は戦前戦後を通じて衆議院議員

* 小山松寿 こやまよししょうじゅ 明治九年〜昭和三四年 生糸商小山与右衛門の長男

東京専門学校(現早大)卒後大阪朝日新聞記者、明治三九年名古屋新聞創刊、大正四年衆院議員当選、昭和十二年衆議院議長、政界引退後は中日新聞の基礎を築く

3 資料⑩『小諸藩歴史散歩』飯塚道重 櫟出版

* 柳田茂十郎 やなぎだもじゅうろう 天保四年〜明治三二年 荒町柳田五兵衛の三男、薬種商から分家して横浜で貿易商を手掛けるが失敗。帰郷後茶、金物、畳表などを扱い、月二日の交代休、賞与の積立て、貸し売り厳禁等の近代的経営商法を導入、明治小諸商人の先覚者。

* 小山久左衛門 こやまきゅうざえもん 文久二年〜大正七年小山庄二二代久左衛門の長男 明治二一年家督相続、醸造業の他製糸業を手掛け、土地開発・信越線開通等の公共事業に尽力郡会議員を務めながら義塾・学習舎の設立に貢献、柳田茂十郎と共に熊二の理解者であった。長男邦太郎は製糸業の純水館を経営国会議員、小諸市長を務め、三男は画家の小山敬三。

4 大原幽学 おおはらゆうがく 寛政九年〜安政五年江戸後期農政学者下総香取郡の生れ。

二宮尊徳と同時代の農政指導者、上田・小諸地方では神道・仏教・儒教を合わせた実践道徳を指導房総長谷村(旭市)で先祖株組合を組織、嘉永永年間佐倉藩勘定奉行となるが自害しえいる。

* 小林葛古 こばやしくずふる 寛政五〜明治一三年八満村名主小林四郎左衛門正美。

俳諧を小林一茶から学び、大原幽学の性学(実践道徳)を取入れ薬用人参、甘藷栽培を行う、小諸の農村生活を『幾利茂久佐(きりもくさ)』と題して著している

* 小山魯恭 こやまろきょう 安永五年〜天保四年 与良町

父、魯水 小山藤兵衛信成、と共に小林一茶、谷文鳥、酒井抱一などと交遊、文政八年『糠塚集』五編を上梓、小諸領内糠塚山に、観月堂を建て百五十余の門人を抱えた。

5資料⑫ 『佐久自由民権運動史』 上原邦一 三一書房

* 石塚重平 いしづかじゅうへい 安政二年〜明治四十年 市町庄屋 石塚家長男 十八歳で小諸町副戸長となる。 明治八年政治結社「盤鴻社」設立、

自由民権運動に従事、自由党創立に参加、明治二七年から衆院議員四期務め、大蔵省官房長官、衆院委員長、市町養連寺に顕徳碑がある

6 資料⑬『復刻・小諸繁盛記』塩川友衛 櫟出版

* 日向吉次郎 ひなたきちじろう 嘉永四年〜大正九年 江戸に生れる 幼名半之助 喜多流謡曲宗家の謡曲師として維新を迎え、伝手を頼って小諸に移住、製糸工場で働 きながら謡曲の師範として熊二や藤村と交流、市内光岳寺境内には藤村撰文の碑が建てられている。 戦後、宗家喜多六平太により市町養連寺に改葬されている

* 鈴木善人(すずきよしと) 天保元年〜明治三二年 本名善之助尾州徳川家囲碁指南役 本因坊棋士として、維新後小諸に定住、門人多数を抱え光岳寺に六六歳の時に記念碑が建てられた。 明治三九年熊二の証言により 信濃毎日新聞社は「信州の奇傑伝」の一人に選んでいる。

〈藤村の赴任と義塾を訪れた人々〉

島崎藤村が初めて小諸の熊二の家を訪問した様子が明治二九年三月一日の日記に記されている(1)。 『三月一日(略)午後島崎春樹来訪』 『三月四日朝島崎春樹帰京 金貳拾円借し渡ス(略)』

この時藤村は前年の八月に明治女学校教師を退職、馬籠の生家が大火に見舞われ困窮していた。 明治二九年九月から仙台東北学院に教師として赴任するが、十月には母の縫が死去、一旦郷里に戻っていた。

明治三十年七月に東北学院を辞職、東京で処女詩集『若菜集』を刊行している。

明治三二年二六歳の夏は木曾福島の義兄高瀬薫の家で過ごし、詩集『夏草』を刊行。

新人の詩作家として文壇の注目を浴びていた。

明治三二年四月小諸義塾に国語・英語科の教師として赴任、函館出身の秦冬子と結婚、小諸町馬場裏に新居を構えた。藤村二七歳の時であるが、小諸義塾赴任を決意する迄の熊二との交流が判る資料は遺されていない。(2)

『日々の記連屋主人』と題した明治三三年一月からの日記には『一月十二日〈略〉島崎氏来訪信児(戦艦)の玩具を恵贈せらるる(略)』とある。

二九年九月に結婚した熊二と隆子の間には男子が生まれていた。(戸籍上は次男)数日後には新婚間もない妻の冬子も訪れている。(3)

小諸で六年間を過ごした藤村と冬子は三人の女の子を授かっている。十六歳の時、熊二から基督教に導かれ明治女学校教師となったが、二十歳の時、教え子との恋愛感情に自責を感じ、信仰の道から離れている。

同僚、北村透谷(4)の縊死、母縫の病死など不幸に見舞われ、自殺を思い立つほどであった。藤村は新しい命を授かり神に救われた形となり、熊二や鮫島、丸山晚霞など義塾教師や生徒との交流から心を癒され、周辺の所謂在方の人々の生活に興味を示し、作家としての道を志す契機となった。

若手の詩作家として文学界で注目を浴びた藤村の所には友人・知人が訪れていた。東北学院時代に知り合い後に民俗学の第一人者となった柳田国男(5)。共に作家を目指していた田山花袋(6)は馬場裏の自宅に泊り、夜を徹して語り合った。

藤村より十歳若い小山内薫(7)は馬場裏の藤村宅を訪れたのが初対面で、彼の芸術論とその感覚に藤村は驚愕している。藤村の詩に感動して訪れた中学生の有島生馬との交流は晩年まで続いた(8)。

明治三三年の十月藤村の所を訪れた徳富蘆花は熊二にも面会している。蘆花の兄、徳富蘇峰と熊二は旧知の間柄で同じ頃小諸義塾で講演を行い熊二と意気投合していたが、弟の蘆花と熊二の所で同席した基督教新聞の記者、川添万寿得は二人の話が全くかみ合わなかった」と語っている(9)。

ここに挙げた人々は、訪れた時期は前後しているが、文豪島崎藤村に大きな影響を与えた人々である。

【注】

1 資料⑦P1249

2 資料②(島崎藤村『破戒』新潮文庫) P1496

3 資料⑦P1264

北村透谷 きたむらとうこく 明治一年〜明治二七年 本名門太郎父は小田原藩医師 明治十九年東京専門学校政治科(現・早大)中退 基督教入信後、新渡戸稲造の指導を受ける、二五年『女学雑誌』で藤村と知り合う、『国民之友』『文学界』での評論活動は藤村に多大な影響を与えた。

5 柳田国男 やなぎたくにお 明治八年〜昭和三七年 民俗学者、兵庫県生れ 旧姓松岡 明治三四年旧飯田藩柳田家の養子となる、帝大卒後農政事務官、郷土史研究の傍ら藤村、田山花袋、小山内薫等とイブセン会を始める。『遠野物語』などを著し民俗学研究の第一人者として活躍する。小諸を訪れた時は長野での講演の帰途で僅かな時間であったが強い印象を与えている。

6 田山花袋(たやまたい) 明治四年〜昭和五年 群馬県生れ、小説家 本名録弥(ろくや) 長兄の田山実は『大日本地震史料』編纂者 尾崎紅葉に師事、代表作「布団」を発表、自然主義の国木田独步、柳田国男等と交わり小説家を目指す。藤村とは馬場裏の自宅で夜を徹して語り合っていた。

7 小山内薫(おさないかおる) 明治14年〜昭和3年(広島県生れ) 小説家、演劇作家 旧制一高から東大入学時、内村鑑三から基督教への指導を受ける。同人誌『新思潮』創刊藤村を慕って訪問、藤村の上京後も交際が続き、詩作から小説へ転じた藤村作品に多大な影響を与えている。

8 有島生馬(ありしまいくま) 明治十五年〜昭和四九年 神奈川県生れ 画家 随筆家 本名壬生馬(みぶま) 長兄武郎は作家、次兄は文芸評論の里見惇、学習院中等科在学中小山内薫の紹介で藤村を訪ねる。藤村武二に師事、藤村作品の挿絵、装丁を手掛け藤村のフランス留学を支援。日本ペンクラブ設立時は会長を藤村、副会長を有島が務める。

9 資料⑨P186

*徳富蘇峰(とくとみそほう) 文久三年〜昭和三二年 本名猪一郎 ジャーナリスト

熊本英学校から同志社転入、基督教徒(熊本バンド)で熊二とは新島襄を介して面識を得た『国民新聞』『国民之友』を創刊、政界にも進出、明治 大正 昭和のオピニオンリーダー

*徳富蘆花(とくとみろか)明治一年(昭和二年) 本名健次郎 徳富蘇峰の弟 小説家

同志社で熊二の盟友横井時雄から受洗 熊本英学校教師から国民新聞記者、小説「不如帰」刊行後、基督教社会主義に傾倒兄とは袂を分けて行動、藤村を『文学界』の同人として訪る

〈熊二と藤村の師弟から影響を受けた人々〉

島崎藤村が小諸を去った一年後に小諸義塾はその役目を終えたかの様に閉塾した義塾十二年間の歴史の半分、六年間を小諸で過ごした藤村の姿から多くを学んだ人々もいた。藤村が基督教の棄教に至った経緯を、失恋や友人の縊死からと解釈されているが、十六歳の藤村を基督教に導いた熊二はそのことは敢えて問い質していない。

義塾の許認可について、田口卯吉を通じて得た文部省の情報を、熊二に伝えたのは藤村で、熊二は内心藤村を義塾の後継者にと思っていたと思われる。前後して、図面の教員に明治学院で二年後輩の三宅克己(1)が就任している。基督教徒の三宅は、藤村と同じく新婚生活を小諸で過ごした。三宅を最初に小諸に誘ったのは同じ水彩画家の柀津村出身の丸山晚霞(2)である。

三宅の後任を晚霞が勤めると、後輩の洋画家青木繁(3)坂本繁二郎(4)等が訪れ藤村とも交流している。新たに教師として渡辺寿(5)を藤村が熊二に紹介したのは明治三年の学期末であった。

藤村は、長女みどりが生まれた頃には、義塾教師の傍ら近所の娘たちに枕草子や作文を教え、妻冬子は習字の手ほどきをするなど小諸の街にも馴染み、夏には函館から冬子の父慶治が訪れている。

冬子と明治女学校の同窓で安曇野の相馬愛蔵と結婚した黒光(旧姓星良)が上京の途中に自宅を訪れている(6)。相馬愛蔵は熊二が佐久で最初に携わった廃娼運動で、「村木しげ」を救済した時以来であった。(VI章廃娼運動と熊二参照)。

黒光は熊二の創立した明治女学校に惚れ、フェリス女学校から転校、藤村から指導を受けていた。夫婦は東穂高村で立ち上げた研成義塾を井口喜源治に任せて上京、その後新宿中村屋を創業、大正デモクラシー・モダニズムの拠点となっている(VI章研成義塾と小諸義塾参照)(7)

相馬と井口が立ち上げた研成義塾の精神的支援者が内村鑑三であったことは前述したが、内村と小諸義塾の交流が頻繁になったのは此の頃からである。

内村は当時、徳富蘇峰の「国民之友」「万朝報」などで文筆活動を行い、『聖書之研究』を創刊(8)、同人誌『文学界』の新人として島崎藤村の存在に注目していた。

熊二と藤村が明治学院時代からの師弟関係である事を知ると、書簡を通じて藤村の赴任して小諸義塾への訪問を望んでいた。

明治三三年十月に熊二は念願の水明朗が完成すると内村を招待、荒町の光岳寺で演説会を開き、翌日は懐古園を散策するなど歓待した(9)。

内村の基督教を前面に押し出さない無教会主義は義塾生徒や青年たちに受け入れられ、これ以後も内村は再三小諸を訪れている。

熊二の日記には多くの来客の氏名が記され、藤村を筆頭に塾教師達も水明楼を頻りに訪れていたが、藤村と内村が直接会話した記録はなく、当時の藤村の資料からも見当たらない。此のことからも藤村が小諸では、基督教から一步引いた行動をしていたことが推測される。

小諸は佐久地方の自由民権運動の中心地であったが、その後は普通選挙期成同盟運動の拠点にもなっていた。

日清戦争以後、国民の目は海外の事情にも注がれ、地方の人々の知識欲が高まっていた。日記に会話の内容や基督教に関する記載はないが、内村の教導により小諸の若者達を中心とした「理想団」が結成された(10)。

佐久郡春日村出身で外務省翻訳官の岡部次郎(11)が訪れたのも此の頃である。

岡部は以前兄の岡部太郎と上田教会の小島弘子の紹介でハワイからの一時帰国直後に熊二の所を訪れていた。

理想団運動の推進者でもあった岡部の講演会には多くの町民が集まり、信濃毎日新聞の主筆、山路愛山(12)の講演会も熊二の交遊関係から小諸で開催した(13)。

メソジストの山路と熊二は義塾の運営についても相談をする間柄で、藤村が小諸に来て最初に著した小説『旧主人』の内容に危険性を感じ「発禁本」と指定したのも山路愛山である。是は物語の内容が「熊二夫妻がモデルではないか」と批判されたことから、藤村に対する中傷ではなく、藤村の能力と将来性を認めた故の事であった。

藤村の作品には実在の人物が多く登場している。小説『破戒』に登場する市村代議士モデルは、熊二の佐久移住以来の友人立川雲平で。代言人(弁護士)として長野や上田に事務所を構えていた立川は、佐久・小諸を選挙区にして一度は政界に進出していた。

藤村は破戒を執筆する為に小県や、北信濃の山村を取材で訪れて、その際に熊二から紹介された山路愛山や立川雲平からの情報を役立てている。

小説家島崎藤村の人生に大きな影響を与えた人物に佐久郡志賀村の神津猛がいる¹⁴⁾。神津猛の妻は藤村が小諸で枕草子や作文を教えていた商家の姉妹の姪で、既に義塾や藤村の存在も聞き及んでいたと思われるが、熊二と初めて会ったのは明治三六年八月二五日に義塾を訪れた時である。年明けの一月二三日には熊二が神津の所を泊まり込みで訪問している。

明治三七年三月二七日の義塾卒業式には来賓として神津猛が列席。四月には一族の神津藤平も義塾を訪れて義塾へ経済的支援を約束したと思われる¹⁵⁾。

熊二から藤村の経歴を聞き感動していた神津は明治三七年の秋、志賀の自宅に、熊二と藤村、丸山晚霞、立川雲平を招いて松茸狩りに誘い、その後の宴は大いに盛り上がり、一泊の予定を二泊に延するほどであった¹⁶⁾。

神津猛が藤村を支援するようになったのはこの時からで、藤村が小説破戒の構想を神津に打ち明けたのはこれより後である。

【注】

1 三宅克己 みあけこつき 明治七年〜昭和二九年徳島県生まれ 洋画家 白馬会会員

水彩画家を志し明治三十年米國から英国に留学、明治学院では藤村の二年後輩、藤村の赴任と前後し小諸義塾図画講師に赴任、明治三四年丸山晚霞に後任を託す

2 丸山晚霞 まるやまばんか 慶応三年〜昭和十七年 画家

小県郡祢津村生れ 明治三二年、三宅克己の勧めで渡米、水彩画家として欧州巡遊、帰国後義塾で三宅の後任講師を務め、不同舎から「太平洋画会」を創立 生家の祢津村にアトリ「羽衣荘」を構え小山周次等を育てる。

3 青木繁 あおきしげる 明治十五年〜明治四四年洋画家 不同社 福岡県久留米生れ 明治三三年東京美術学校で黒田清輝に師事、三五年同級生坂本繁二郎と群馬妙義山、

信州小諸へのスケッチ旅行の際、先輩丸山晚霞を頼って訪れ藤村と知り合う。
代表作に『海の幸』がある

4 坂本繁二郎 さかもとはんじろう 明治十五年〜昭和四四年 福岡県久留米生れ 洋画家、青木繁とは小学校同級生の青木繁と共に不同社の先輩丸山晚霞を訪れ藤村と知り合う。明治・大正・昭和を生きた画家、梅原龍三郎、安井曾太郎と並ぶ日本洋画界の巨匠。

9 治・大正・昭和を生きた画家、梅原龍三郎、安井曾太郎と並ぶ日本洋画界の巨匠。

5 渡辺寿 わたなべひさし 福岡県柳川出身、東京専門学校(早大)卒、

内村鑑三から基督教の指導を受け、藤村の紹介で義塾講師就任、小山内薫を藤村に紹介、小諸藩医師佐野家の養子となり、義塾閉鎖後は宣教師として渡米

6 資料⑭ 『島崎藤村と小諸』P245〜246

7 資料⑳ 『新宿中村屋 相馬黒光』

8 『聖書之研究』内村鑑三により、明治三三年から昭和五年まで刊行された

日本最初の聖書雑誌

9 資料⑦ P1276

10. 「理想団」万朝報、東京独立雑誌の記者内村鑑三が社会評論で、日露開戦に際しては非戦論唱え。

黒岩涙香、堺利彦、幸徳秋水らと結成、立川雲平も理想団の推進者であった。

11. 岡部次郎(おかげじろう)元治元年〜大正十二年春日村岡部弥衛門の次男、兄は岡部太郎

上田中学卒業後同人社で学び高橋是清に従い渡米、帰国後は外務省翻訳官、

日露戦争時は外国通信員監督、大隈内閣の海軍参政官を務める、衆院議員には四回当選している。

12. 山路愛山(やまじあいざん)元治元年〜大正四年 幕臣天文方山路一郎の長男

静岡教会でメソジストに入信、蘇峰の「国民新聞」記者から、慶應義塾教授。

柳田国男と共に『三田文学』創刊に携わる。三一年から三五年まで信濃毎日

新聞主筆を務める。

13. 資料⑦ P1274

14. 神津猛(こうずたけし) 明治十五年〜昭和二二年 志賀村、神津家(赤壁)の生れ

明治三二年慶応幼稚舎卒業、祖父包重の事業、報徳会(農業会)を引き継ぎ家督相続 鉄道、金融事業の重役を務め村政にも関与、一族に長野電鉄創業、志賀高原開発者の神津藤平、同族に通称黒壁の神津牧場創始者神津邦太郎 音楽教育者の神津専三郎(養子・小諸出身)、作曲家の神津善行がいる。藤村の破戒出版の支援の他、田山花袋、

高浜虚子らとも交流。晩年の熊二一家の養育費の援助を続けている

15. 資料⑦ P1312・313

16. 資料⑭『小諸時代の藤村』P1280

《XI》 【小諸義塾の終焉と最後の一文】

〈女子学習舎と井出静の死〉

「さみたれのなめさひしき夕暮に啼きて過行く山ほととぎす」

「青葉さす夏山陰の花一本外二しられぬ春を残して」

明治三七年五月二一日の句である。『廿一日土曜日 義塾学習舎へ出席 土屋 木村隆 太田諸氏 女生徒を伴ひて東沢大和屋別荘を訪ふ』(1)

明治三四年開設した女子学習舎の教師となった、妻の隆子と熊二が女生徒を伴い東沢の別荘を訪れた。別荘は江戸時代から続く小諸本町呉服商「大和屋」の所有で、当主の掛川利兵衛は小諸義塾の支援者で熊二をはじめ義塾の教師達の理解者であった。

島崎藤村は『千曲川のスケッチ』で「山荘」と題して招待された時の様子を描写している(2)(此の大和屋別荘は筆者の自宅小諸市乙東沢から五〇米程の場所に遺されている)。

明治三四年四月十一日、町内の資産家・有力者の後援を得て、熊二の自宅(佐藤知時所有)に女子学習舎を開設した。

女子学習舎規則に「女子に必須の学業技芸を選択して是を将来実地に応用せしむるを目的とす」「小学校高等科卒業か同等の学力を有する者は入学せしむ」とある。

二ヶ年の修業年限で授業科目には家政学、裁縫、音楽、茶道が加えられ 授業分担は舎長の木村熊二が修身 幹事の木村たか(隆子)が英語 習字 料理を担当。

義塾教員の丸山晚霞が図画、鮫島晋が代数・幾何、島崎藤村は土佐日記、徒然草、枕草子を教えていた(3)

(一説に藤村の妻冬子が習字を担当したといわれているが資料②には記載されていない)

女子学習舎の開設に対して塾主の井出静は反対の態度を示していた。

元軍人で実直な井出は周囲の信頼も厚く義塾では漢学と書道を担当。幹事として事務方を担当していた。井出が女子学習舎の開設に難色を示した最大の理由は小諸義塾の経営状況にあった。

文部省による法改正の情報を早期に義弟田口卯吉を通じて入手していた熊二は、藤村や義塾の教師をはじめ義塾監督委員、学務委員が中棚に建てた水明楼を。

度¹⁰ 訪れ義塾の運営について懇談していたことが日記に記されている。

この時期の義塾の詳しい状況が判る記録は遺されていない。わずかに小諸町役場に遺されていた史料を、林勇が『私立小諸義塾沿革史』に三一年度から閉塾する前年の三八年までの記録として掲載されているだけである。

明治三五年からの四学年制の導入を決定後に塾舎を増築。町からの補助に加え北佐久郡からの補助も受けていた(4)。

家塾から立ち上げた小諸義塾の欠点は中途退学者の多いことが挙げられる。

当初はお互いが教え合う形で、塾生にとっては上級学校受験のための予備校の役目を果たしていたが、周辺から通う寄宿生徒にとっては経済的負担が大きかった。

授業のレベルが高い故にそれに追いつけず、終了年度前に上級学校を受験し、不合格になると退学する生徒が多く、月謝と補介金の二本建ての収入だけでは経営は苦しかった。

井出と熊二が女子学習舎の開設、運営に対して意見が分かれ、対立していたことが関係者の間で取りざたされていたが、その井出静が明治三五年三月二十七日急逝した、享年四九歳であった。

小諸藩旧士族の家に生まれ、陸軍憲兵隊副官に任官後、病気休養を願ひ出て帰郷していた、井出静にとって、塾教師と幹事としての勤めは激務であったと思われる。

明治三五年三月五日、義塾は教場の増築に着手したが、その二週間後三月十九日の日記は『井出静氏大患二付田原氏二相談高田丁(町)医師瀨尾原始を招き診断を乞ふ』。『三月二二日 井出氏へ瀨尾原始氏来診付訪問試(手)術料として金百円渡す』とある。自宅での治療をしていたが二七日の夜に死去している。

三月二九日には葬儀が行われた。『小諸義塾と木村熊二先生』には、父の記録と題して次男の陸軍中佐、井出節氏と静の妻簾子が寄稿、発行人、竹沢正武の追悼文が収録されている。

熊二は以前から藤村を自分の後継者と考えていたと思われる、井出が急死した直後の四月五日の日記には『島崎氏を訪ふ義塾々主の件相談』とあり義塾の運営に関して藤村と話し合っていたと思われる。

井出静の急死は、義塾運営の後ろ盾を失い、事務処理の全てが熊二の肩にかかってきた。『四月七日 岩村田へ到り郡役所より金五百円受取小諸義塾々主引受之件郡役所へ届出』(5) 明治三六年の小諸町からの補助金は北佐久郡からの補助金を加え計上されているが実質的には減額されている。

理由には諸説あるが、三三年十一月に町立実業補習学校が小諸小学校に併設されたことに因るが、熊二と隆子が運営していた女子学習舎に対する周囲から批判もあった。

小山太郎はその手記に、「小諸義塾に女子学習舎を併設したるは金権者の女子教育の為に設けたるものにして、クリスチャンの隆子女史の主幸にて極めて派手の教育を浴したものである。之がため小諸義塾はキリスト学校であるとの印象を与えしは無理もないところで、義塾廃滅の素因もここにありと断言するを憚らない」と記している(6)

女子学習舎は二期修学制度であったが明治三六年入学の三期生迄で廃止された。明治三七年五月以後は短期の学習舎となつて存続させていたが、明治三八年三月二一日、藤村が義塾教師を退任すると同時に学習舎も終了している。

『女子学習舎之講習を結了し修業証を授与委員之集會生徒より島崎氏へ寄送品會より教員一同へ記念品贈る等諸事都合好く閉會式を挙ぐ』(7)。

女子学習舎の修了生は殆どが小諸町内の子女三十余名で、『小諸義塾と木村熊二先生』の「門弟名簿」に記載されている。

彼女達の所有していた資料が、当時の小諸義塾や熊二夫妻を知る上で大きな手掛かりとなっている。

熊二は義塾を開いた明治二五年以降、基督教指導者としての活動を中止していた訳ではなく、義塾授業のない土曜日・日曜日、年末年始、学期末の他、義塾は養蚕の繁忙期は休みであったので休日には、依頼を受けて長野や上田、時には諏訪まで足を延ばして講演を行っていた。

義塾開設の為小諸に住居を構えた明治二五年六月以後、日本基督教會牧師の資格をオランダ改革派宣教師の身分に変更していた。

この頃の日記の記載には、平日は『義塾学習舎へ出席、如常授業』。

日曜日は『午後・夕、講義所』とはつきり分けて記し、教育者としての行動と宣教師としての活動は分けていたことが判る。

〈有終館構想と実業補習学校〉

明治三六年の三月から九月まで熊二の日記は記されておらずその前後にも記載のない期間が随所に診られ、記載の内容も断片的で熊二が義塾運営に忙殺されていた様子が伺える。

私立学校としての知事認可が降り、町からの補助金が支給され、藤村はじめ教職員が充実してきた頃から、熊二は小諸義塾とは別に、基督教の理念・教義を踏まえた新たな教育機関の設立を考えていた。

その一つが女子学習舎の開設で、中心となっていたのが妻の隆子で、フェリス和英女学校卒業後、外国人宣教師の通訳として上田を訪れた時、熊二と知り合い結婚しているが教師として生きることを望んでいた。

明治三三年三月市町村立小学校教育費国庫補助法が公布され、隆子は小学校の臨時職員となった。教育の現場に立った隆子は女子教育の必要を感じ、学習舎の創立を実現させたといえる。しかし女子学習舎の生徒は、増えることもなく小諸義塾の寄付者の子女だけの教育機関となつてしまっていた。

小諸義塾に対しても井出静が死去する前年の三四年度予算から町の補助金はすでに減額に転じていた。

最大の原因は、実業補習学校が明治三三年に小諸小学校に併設されたことで、これに対して熊二は小諸義塾の替りに町費に頼らない「有終館」と名付けた私立の教育機関の設置を考え周囲に相談していた。

井出静はこの頃、義塾幹事の肩書で井出が有終館構想に賛成であったのかは不明である。

有終館構想には十五名が出資し、山路愛山、立川雲平等の支援を受け明治三七年には入社規則を起草し、建物の建設にも着手したとされているが、詳しい資料は遺されていない。明治三四年十月の日記に具体的に行動を起こした記載がある。(8)

『十月六日 訪小山久左衛門小宮山権兵衛氏談地所買上之件』。

『十一月十日 (略)依田覚右衛門来訪地所之件を談す』。

『十一月十三日(略)依田覚右衛門氏へ登記之件を談す』。

『十一月十五日 義塾学習舎へ出席訪小宮山氏午後水明楼地方有志者へ書状

差出す』

『十一月十七日 集会無之小山久左衛門 小宮山権兵衛氏来訪 小沼勇次郎氏 集会』

『十一月二七日』朝義塾へ出席井出氏より金円受取諸子へ分配ス 十時出発長野へ 到り山路愛山を訪問 立川氏と会遇内川知事を訪有終館設置之 賛成を得たり 夕帰宅』。

〈教育制度の変遷と小諸義塾〉

信州に移住を決意してから十年が過ぎると友人知人も増えて、周囲の情勢も熟知していたと思われるが、時代は熊二が考えている以上に変化していた。

明治三五年の日英同盟が締結される前後から、国家予算は軍備に多く回され、教育に関する郡と町からの補助金は減額されていた。政府の教育施策も三七年四月から、全国の小学校では国定教科書の使用を開始、明治四十年の小学校令改正（義務教育六年制）に向けて整備が進められた。

当時の学校制度は尋常小学校四年、高等小学校二年で、その上に五年制の中学校を置くのが一般的であった小諸町では高等小学校も四年制としていたので、卒業生は中学二年修了と等しくなる。小諸義塾はその後の中学三、四、五の三年間の学習を、四年間かけて行う為に、四年制を導入した。

熊二は初等教育では人格形成に拘泥せず、学力のついた中等教育でじっくりやれば良いという考え方であった。

小諸小学校の校長は実業補習学校の校長も兼務し、校長の佐野は朽木県の出身教育に対する理念で熊二と共感するところがあり、お互いがよそ者同士という間柄で親しくしていた。

明治三四年三月小諸小学校は佐野校長から、佐藤寅太郎校長に替った。

小諸小学校は当時、職員間の揉め事から佐野校長に対する不満と不信感があり、地元出身の佐藤校長への期待感は大きかった。

佐藤寅太郎(9)は岩村田藩長土呂村の生まれ、教育熱心な両親の下で育った訓導（正規教職者）で、前任の岩村田小学校々々長時代から佐久郡下の実業補習学校を県の管轄、乙種への格上げを提唱していた。佐藤は信州教育の中枢であった長野師範学校出身のたたき上げの訓導で、その辣腕ぶりは県下の教育界でも知られていた。

着任後早々に小諸小学校に梅花の徽章を制定、全校生徒による浅間登山を実施するなど当時の国家思想に沿った教育指導を行っていた。

当時、教育界でも問題になっていた対日露政策では、熊二も佐藤も日本国民として主戦論に賛同の立場をとっていた。しかし、教育の根本理念では佐藤の教育姿勢とは相容れられない所があった。

熊二は初等教育では人格形成に係わる教育には力を入れず、中等教育でじっくり行えば良いという考えであったが、既に国の教育方針は初等教育から国家を意識した人格の形成を目指していた。

此の頃の教育界が紛糾していた様子が解る史料が遺されている

明治三六年二月十三日北佐久郡蓼科小学校兼蓼科補習学校々々の保科百助(10)が、小諸町議会の学事視察員の荻原勘助と義塾創設に係わった小山太郎に宛てた書簡と 同年 六月十九日に小諸小学校主席の伴野文太郎が、小山太郎に差し出した書簡の内容を見ると保科自身が一度は基督教に入信していたことから、熊二に対して好意的ではあったが、「小学校教育の場では佐藤に一步譲り、話し合いの場を持つべきだ」と語っている(11)。

但しおまげがあり「自分なら五年も懸からず教育改革をして見せる」などと法螺を吹いているところが、保科の変人たる由縁で、当然熊二には受け入れられない意見であった。

もう一通の書簡は小諸小学校の内部告発とも言えなくはないが、小山太郎に学校内の事情を説明した文面で、そこからは小諸出身で当時の郡視学、与良熊太郎(12)の影響が大きかったことが判る。

熊二と佐藤、二人の教育に対する意見の違いは、郡議会や町議会でも取り沙汰されていた。

本稿で参考書している資料(12)『信州教育と小諸』の著者、荻原三博氏は当時の長野県下の教育事情から考察し、社会情勢が大きく変わっていたことを論じている。

〈義塾の十周年と藤村の退職〉

明治三六年の熊二の日記は、二月一日から十二月三十一日まで記載漏れがあり、わずかに三月二二日の日付で、『女子学習舎生徒卒業証書授与式を挙ぐ、委員小山久左衛門、小宮山権兵衛、塩川賢三、立合井出登一郎氏来訪 塩川幸太氏へ有終館の件を託す』と記してある⁽¹³⁾。

塩川幸太とは小諸森山出身の県会議員で佐久銀行の頭取で熊二の指導により軌道に乗り始めていた森山の缶詰会社の役員も務めていた。

熊二はこと有る毎に、有力者に義塾へ協力を依頼していたと思われる。

この年義塾は創立十年を迎え、義塾の財政基盤を強固にしようとした熊二は三月頃から行動を起こしていたが、詳しい資料は遺されていない。

『私立小諸義塾沿革誌』は小山太郎の日記を引用し当時の様子を記している。

「五月二四日 財団法人として基金一万五千元募集の協議あり、来る十月三十一

日義塾十年記念会を開き有力者百六十名招待に決す〈略〉」

「五月二五日 校舎建築費につき物議喧々たるにより、出金者に対し、木村先生より決意書を提出す」

「五月二八日 女子学習舎に地久節祝賀式*あり。〈略〉」

「五月三十一日 小諸義塾校庭に於いて十年記念祭挙行主催者小山久左衛門外七名」

「六月十五日 小諸義塾基金募集方法を定め募金に着手。趣意起草は木村先生」

*基金募集方法は以下の通りである。

- 一、募集総額一万五千元以上。
- 一、一口金十五円、一回金三円づつ五ヶ年に出金の事。
- 一、出金期日は毎年八月末日。但し明治三十六年度に限り十二月末日。
- 一、一時出金は一口金十二円。一、金員は六三銀行又は

小諸銀行へ振込の事。

一、協議員中より専務委員十五名を挙げ募集上の事務及び、法人組織に至るまでの事項を掌理す

熊二が起草した長文の趣意書が掲載され義塾の沿革が述べられ、更に将来への希望を込めて訴えている⁽¹⁴⁾。

募集総額は現在と比較すれば一億円を超える金額で、一口の金額も当時としては決して安い金額ではなかった。

この時の後援者は女子学習舎の協力者であり、募金協議会委員の十五名の殆どが諸町の関係者で、実質の賛同者は増えていなかった。熊二の力のこもった文章も、実を結ぶことにはならず、時の流れはその大望とは逆の方向に流れつつあった。

小諸義塾基本金募集の趣意書の中で「わが校舎に出入りせし青年の既に千を以て数ふべきものあればなり」と熊二は誇張して述べている。

資料を見ると、入学者は五百人に満たなかったが、卒業生も五十人位であったことが判る。初期には二年の在学中で師範学校を受ける生徒が多かった事が判り、学業不振だけではなく、経済的理由で中退した生徒もかなりいたと思われる、十人に一人の割合の卒業生とはかなり厳しい指導であったことが判る。

当時としては珍しい地方の小さな私立学校でありながら、十名に満たない教師達が一对一で生徒と向き合うという教育方針の賜物といえる⁽¹⁵⁾。

義塾創設十年を迎えた頃の様子を著した書籍は、その多くが小山太郎の遺した日記を基にしている。そこには明治三六年十二月十五日の出来事として

『島崎藤村氏明年を期して帰京との件に付、鮫島理学士来談』とあり藤村と小山太郎の年齢は一つ違いで、親しく交際していたことが記されている⁽¹⁶⁾

熊二の日記に藤村が義塾退職を相談した記載は、明治三七年一月十九日、『略』島崎氏より相談の件あり』翌日の『廿日 朝義塾へ出席島崎氏訪問〈略〉』とあるだけで、二人の間でどんな会話が有ったのかわからない。

藤村が義塾を退職する事を公にしたのは明治三七年三月で、熊二の日記には

『十二日(金)氣候寒冷曇霰相半 朝役場へ出張池野町長より義塾補し度旨談有之ニ付義塾へ到り教員諸氏と相談し授業を三十八年度も続する事ニ決定 島崎氏ハ近而教授を辞し出京せん事を請わる自他教員ハ俸給二割を寄賦する事と成りたり』と記されている⁽¹⁷⁾。

募金による資金の用途は立たず、町からの補助金の減額を通告されたことから、教員全員の給与を二割寄付という事態に陥っていた

〈理想団と小諸義塾〉

家庭には恵まれなかった、と云われる熊二であるが、五二歳で再婚した隆子との間には三男三女を授かっている。

『神の恵みである』と熊二は日記に記しているが、非情にも熊二の親しい人々との別れが相次いでいた。

渡米する前の熊二を知る友人で米国留学という海外への目を開かせ、上陸後も物心両面の世話をしてくれた外山正一が明治三三年にこの世を去っていた。

信州への移住を決意する契機となった、小諸・佐久伝導の案内役を務めた、関五太夫(友三)が、明治三八年六月十三日に死去、享年三二歳という若さであった。

関の実家は小諸荒町で北国街道から佐久方面への馬車鉄道会社を経営していた。友三は明治学院卒業後、日本画家を目指し神谷蘭水の門弟となり関邦文の画号を送られていた、その後は鉄道の開通により馬車会社が衰退した為、結婚後は小諸で郵便事業に携わっていた。

小諸時代を振り返った藤村が著書の中で、「小諸の関五太夫君もすでに故人であるが、この人が私と同じ明治学院の出身で、そんな旧知の手引きにより、私も小諸義塾の一教師として先生の教育事業を手伝う身となったのである」と語っている⁽¹⁸⁾

義塾の開設直後からの協力者、柳田茂十郎が三三年四月、荒町の嶋田常蔵氏も三十三年十二月に死去している⁽¹⁹⁾。

十歳下の義弟、田口卯吉が病に倒れ一度は回復していたが、明治三八年四月十四日に死去した。常に相談相手であった実兄の桜井勉は明治三五年には官職を退き

出石に戻り、書簡での交誼だけになっていた

有終館の設立に向けた寄付金募集が具体的にどこまで進展していたのか、資料となるものは遺されていない。

趣意書は百五十名に渡り配られたが、宛先の記録はないがその中には基督教関係者も当然いたと思われる。基督教信徒も世代交代が進み若い世代は信仰に対する

考えが変わってきていた。

熊二と共に信州伝導活動の中心人物であった、上田の小島弘子が明治三七年九月

二四日死去している⁽²⁰⁾。

鉄道開通以来、小諸の発展は目覚ましく。維新後の教育を受けた若者達が、経済・文化の担い手となっている。財団法人に向けた募金計画に名前連ねている。

小諸の商人は世襲が多く、柳田、嶋田はその息子達が世襲していた。彼らは中央の政治・経済の動きにも敏感に反応、海外にも目を向け、その向学心が小諸の繁栄の原動力となっていた。

代表的人物が荒町の小山久左衛門で、明治十六年家督相続後、代々の醸造業の他、生糸製造業を手掛け、御牧ヶ原の開発など公共事業に尽力。義塾と女子学習舎の学務員も務め、有終館の財団法人化・募金計画の立案者の一人でもあった。

女子学習舎の生徒や藤村を東沢の別荘に招待した江戸中期からの老舗、本町呉服太物問屋の掛川利兵衛も熊二と藤村の理解者で有終館構想にも賛同していた。掛川は後に小諸商工学校設置の際には敷地を寄付している。

明治三十四年黒岩涙香らによって理想団⁽²¹⁾が結成された。小諸でも岡部次郎、内村鑑三による講演会が開催され、若者達による活動が継続していたことが日記からも覗かれる⁽²²⁾

明治三八年四月八日の記載に『夕理想団集会(出席略)この団体ハ無気力之青年共三て後來義塾へ非情なる害物となりたり其原動力ハ渡辺寿なる義塾教員なりき』。普段は他人を誹謗中傷した内容は記さない熊二が激怒している。

渡辺は小諸町医師の佐野義質の娘安次と結婚し、佐野姓となっていた。基督教徒で内村鑑三を師と仰いでいた。藤村辞任後の義塾のまとめ役として期待していたが、彼に対する不満と思われ、其処には若い世代と意見が合わせられない熊二の姿があった。

明治三八年五月に日本海海戦の勝利によって、日露講和条約が締結され八月には、義塾の諸問題の相談相手であった小山久左衛門が養蚕業の海外視察の為不在で熊二は孤立した形となっていた。

理想団の活動は社会変動の一つとされているが小諸の若者たちの間では、義塾の諸問題も以前から論じられ、義塾崩壊の引き金になったともいえる。

『四月二八日 理想団小山久左衛氏方三開き義塾補助金の件を議ス』とあり、翌日の日記には『四月二九日 島崎春樹家族と共に東京へ移住ス、(略)』と記されている⁽²³⁾。

〈小諸義塾と町議会〉

明治三十八年四月十一日。義塾は新年度の授業を開始しているが、藤村が四月に辞任した以降の熊二の日記は断片的で、六月十三日から十二月三十一日まででは遺されていない。

小諸町議会は明治三十八年十月十二日の協議会で小諸義塾を町立中学校とする方針を打ち出し十月十三日には熊二を交えた創立委員がこの問題を協議した。

熊二以外の小山太郎等の委員は、不在の小山久左王門からの申し送りもあり「義塾を小諸町に引き渡すこととして木村先生に町から五百円くらいは出金せしめた」という意見に賛同。これに対して熊二は「一文も要らぬ」と明言している。㉔。

十一月十七日にはこの事態に代言人(弁護士)の立川雲平が上田から参加して立ち合い、金額を九百円と決めた。

十一月二日には小山太郎が小諸銀行の小林市之助(義塾創立委員の一人)を訪ね、熊二の依頼として義塾建築費寄付者に対する、義塾引継事後承諾請求書を渡した。この書類を作成したのは立川の指示によるものであった。

十一月二十九日の義塾引き渡しには立川は参加できないので、代わりに小林が立ち会い、熊二の九百円は小林が預かつて受け取り、捺印した。

しかし、十二月七日に塾舎建築寄付者の有志達から、「自分達には無断で町へ引き継いだ」として抗議が起きた。

明治二九年四月に建てた洋風二階建本館の建築費への寄付は八百円に及んでいた。個々の寄付の詳細な記録は遺されていないが、嶋田常蔵、掛川利兵衛等の寄附金拠出者は当人でなく、その二代目の人達である。

町の若者達の為にと先代の遺志を継いで義塾の支援を続けてきたのに相談もなく塾舎を町に売り渡し、売却金が熊二に渡されるということは納得がいかないことであつた。㉕。

弁護士立川の立川は此の事態を予測し、事後承諾請求書を用意させていたと思われる。十二月九日の町議会は金額をめぐり紛糾したが次のような決議書を可決した。

決議書

一、金九百十五円 臨時教育費

右ハ小諸実業補習学校拡張ノ目的ヲ以テ教授用建物並ニ

器械器具等買得ノ為、年一割二分以内ノ利子ヲ附シ公借ス。

而シテ其償却方法ハ三九年度ニ於テ町費を以テ返却スルモノトスル。

明治三十八年十二月七日 提出

小諸町長 池野 常道

この決定は、十日後の町議会ですらに変更され、教育余剰金より支出することが決議された。熊二に渡す九百円について諸説入り乱れ紛糾していた

〈小諸商工学校の開設〉

明治三十九年一月十五日小諸町議会で小諸義塾を乙種商工学校に変更する事が確定された。

熊二は『(略)井底の痴蛙その為す処常に如斯可嘆なり』と記して、町会議員達の教育問題だけでなく、広い世間を知らない狭い了見を痛烈に批判している。

一月25日町長、町議会議員が義塾を訪れ生徒たちに義塾が変更されることを説明をした。翌日に熊二は校長として義塾の過去と今後について 一年生二九名、二年生十四名、三年生八名、四年生四名の計五五名の在校生に事態を説明した。一月二十九日の日記には次のように記してある。

『義塾へ出席 教員諸氏役場へ書面を出ス 人は自ら破戒するハよし人の建築を羨んで百万詐術を構へ終ニ敗類に至らしむるを以て快しと或ハ自ら掠奪策を企てる人ハ卑むへき人なり教育者にして如斯人あるハ可歎事なり』㉖。

小諸町が義塾の校舎備品を実業補習学校の充実を目的として引き取るはずであったが、最終目的は小諸実業補習学校を乙種商工学校に格上げして、義塾の代わりに開設する事であったことが判る。

本稿で参考としている佐久史談会刊行の『佐久 第四七号・信州教育と小諸義塾』の著者、荻原三博は当時の長野県下の教育界の状況から小諸義塾の閉鎖に至るまでを詳細に考察し、昭和三三年小山太郎氏が存命中に本人からの確認を取って発表している。そこからは小諸町だけでなく、同じく補助金を支出していた北佐久郡議会の意向が大きく働いていたことが判る。

北佐久郡立小諸実業補習学校の校長は町立小諸小学校の佐藤寅太郎が兼任していた。郡下には小諸の他に岩村田・立科の実業補習学校があり、佐久郡視学の与良熊太郎は実業教育の推進者で此の三校を乙種への昇格を目指していた。

既に南佐久郡野沢町には上田中学野沢支校が置かれていたが、野澤中学校への昇格が決められていた。

乙種商工学校も甲種に昇格すると県からの補助金が可能であることから、岩村田出身の佐藤寅太郎は北佐久郡では小諸に商業学校、蓼科に農業学校、岩村田には中学校の開設を目指していた。

郡視学の与良と佐藤は長野県教育会では長野師範学校の同窓で、同じ佐久郡出身であった。公立学校による信州教育の充実を目指す二人にとって熊二が主唱する私学の小諸義塾は邪魔な存在であった。

小諸義塾の廃塾が決定した後の三月二七日の日記には、『(略)鮫島晋渡辺寿塩川政太郎訪 小諸町会へ義塾を廃し乙種商工学校を組成したるも万事不都合の件不少佐藤寅太郎へ一切を委任し鮫島等は策二其員二加わるのミなりとて大ニ不平を陳譜』²⁷。

鮫島達は商工学校の運営には積極的にかかわるつもりでいたが、町当局は、全てを佐藤寅太郎に委任したことから、鮫島達には単に一教師と市の仕事しか与えなかった。闕局鮫島や渡辺達は一年で商工学校を退職、残ったのは地元出身の土屋七郎だけであった。

「ことしげきすみ家をけふそとのして返るもうれしともきふの宿」

「夏草のことわざしげき途分けて」 義塾で生徒達へ事情を説明し、水明楼へ帰る時に詠んだ句で、二月二十の日記には『今日より塾主の關係を解く事を相談ス許之残務を鮫島へ引続き退塾、十年の苦心の義塾も今日にて滅亡ス』とある²⁸。

小諸義塾は明治三十九年二月二十日をもって閉塾している。

熊二は、明治三十九年三月限りで小諸義塾を廃止する旨を、長野県知事大山綱昌に提出している²⁸。

それに先立ち二月十五日附で塾長の退任挨拶状を関係各位に発送している²⁹。

小諸義塾廃止ノ件上申

小諸義塾

右は今般都合ニ依り本年三月限り廃止致候条

此段上申候也

明治三十九年二月三十一日

右塾主 木村熊二

長野県知事大山綱昌殿

先般都合ニヨリ小諸義塾ヲ町へ引渡候処乙種商工学徒ニ変更相成候趣ニ付小生今後母校ニ関係無之候此段辱知諸君ニ謹言候也

明治三十九年二月十五日

木村熊二

〈最後の一文〉

義塾卒業生の小山周次が編集した『小諸義塾と木村熊二先生』には卒業生と義塾職員の名簿が記載され、囲み記事で次の一文が載せられている。

小諸義塾の書類及び印章等の一切は、小諸商工学校に引継の際、保科、友野氏の書簡中にも暗示さるるが如く、外部に在つて、義塾打倒に策謀した一教育家の手により、信濃教育史中から、小諸義塾を抹殺する目的を以て私かに、焼却されたものであることを、当時の役場吏員として、其間の事情に精通する一故老は証言した

この一文が掲載された書籍は「木村先生記念碑事務所」が編集、限定二百五十部が昭和十一年十月二十八日印刷され非売品として発行、熊二のレリーフ完成記念に義塾関係者に配られた。近年この書籍が市中の古書店等で取引されているが、その一部には巻末に記載されているこの一文を黒く塗り潰した本やこのページが抜き取られている本もあると聞いている。熊二の生涯を知る上で、最も貴重な小諸義塾に関する資料がこのように扱われていることは、義塾の閉鎖が熊二の意としない所からの力によつて起きていた事がわかる。

この文面は義塾を知る人々の気持ちが進められた一文と言えなくもない。義塾に関する史料の少ない事を、研究者は異口同音に嘆いている。長野県の教育史の中でも、木村熊二の事は殆ど語られていない。

大正十三年六月に刊行された『長野県教育五十年史要』では簡単に扱われているに過ぎず、昭和十年五刊行の『信濃教育会五十年史』の年表を見ても、義塾の事は見当たらない。

昭和十年六月に刊行され『教育功労者列伝』の中にも熊二の名前は入っていない。『信州人物誌』(昭和四八年再発刊)にも名前が挙げられていないと荻原三博氏は指摘している。『千曲・第一一四号 小諸義塾を抹殺した信濃教育史』で依田四郎氏は昭和なつてもその信州教育界の姿勢が変わつていないと論じている。

長野県内にはミッションスクールが開設されていないことは前にも記してあるが。県内の私立学校は安曇郡の研成義塾以外は、諏訪郡の湖畔学堂、大同義塾も寄付金により運営されいた為、小諸義塾と同時期に廃校に追い込まれている。唯一松本の「戊戌商業学校」は既に財団法人が運営していたので明治三五年、「松本商業学校」と改称して甲種実業学校となっている。

明治三十九年三月三十日の日記には「三十日 金曜日 曇天 懐古園へ旧義塾有志者を招待して多年義塾へ対する厚誼を謝す」とあり、来会者の氏名が記されている。

翌日、列車で長野市へ向かう様子を小山太郎は自身の日記に

『明治三十九年三月三十一日 小諸義塾設立以来青年教育十二年、女子学習舎を起し女子教育にも尽し、洋桃栽培、缶詰事業を奨励するなど地方の恩師たりしも遂にその容る々処ならず木村熊二先生当町を辞し二番列車にて長野市へ去る。小諸駅見送る人重なる顔触、小山久左衛門、平野五兵衛、小山太郎、其他に見送る人なし、堯季の世也』と記している(30。(傍線筆者) 同じこの日の熊二の日記には「三十一日 土曜日 晴寒威甚 午前十時小諸町を出発別を送る者甚多し小山久左衛門氏厚意可謝也十二時過長野市へ着スカッター并教会停車場二歓迎ス」(傍線筆者)見送る者と見送られる者、両者の心に去来するものは何であつたらうか。

【註】

- 1 資料⑦P315所収
- 2 『千曲川のスケッチ』P35～40 島崎藤村 新潮文庫
- 3 資料②P166
- 4 同 P170
- 5 資料⑦P297～298
- 6 資料②P167
- 7 資料⑦P319～320
- 8 同 P292～294所収
- 9 佐藤寅太郎(さとうとらたろう) 慶応元年～昭和十八年 教育者 衆議院議員(1期) 長土呂村(佐久市)出身 明治二二年長野師範学校卒後、北佐久郡小学校訓導、岩村田小学校長歴任、三四年小諸小学校実業補習学校長、小諸商工学校校長から県視学学務課長、明治四四年信濃教育会副会長、大正九年衆院選議員、教育界に復帰後、岩村田中学を町立から県立に移管させ校長を務める。

10. 保科百助ほしなひやくすけ明治一年〜明治四四年通称五無齋 教育者、地質標本研究者

横島村(現立科町)出身 明治二四年長野師範学校卒、教職の傍ら鉱物採取を行い、

三三年蓼科小学校長の時にパリ万博に鉱物標本を出品、三七年長野市で保科塾を開くが一年半で閉塾、県内の全小学校に標本と蔵書を寄贈するなど、独自の教育論とその風体から奇人と呼ばれたが、明治四四年死去。

11. 資料⑫萩原三博「信州教育と小諸義塾」P.2〜5

12. 与良熊太郎(よらくまたろう)万延二年〜大正五年与良市右五門の次男 教育者

幼少期から論語を学び、明治十三年長野師範卒後、小諸小学校教師、臼田小学訓導、

明治二一年から長野師範学校訓導。明治三十年北佐久郡視学、三八年長野県主席視学、明治四三年野沢中学校々長を務める

13. 資料⑦P-307

14. 資料②P-177〜80

15. 資料⑨P-196〜200

16. 資料②P-178

17. 資料⑦P-312

18. 資料①P-57

19. 資料⑦P-279『明治参拾参年十二月七日 嶋田常藏氏の仏湖は余か義塾建設以来の校友に而為人俠気あり家に千金を累ぬ小諸二而第一之人なり可惜逝去』

20. 同 P-318

21 「理想団」 明治三四年黒岩涙香*創刊の『万朝報』は明治三十年代か評論の黒岩涙香が社会改良を提唱、堺利彦、幸徳秋水、内村鑑三らが加わり結成されたが、戦争をめぐって

非戦論から、開戦論に転じたことにより、非戦論の堺、幸徳と対立『聖書の研究』では日露戦争のみ非戦論を主導する内村により解消された。これにより一部の基督教徒の左傾化が進むことにもなった。

* 黒岩涙香(くろいわるい)文久二年〜大正九年本名周六土佐郷士の生まれ

明治二二年都新聞主筆から二五年万朝報創刊 足尾銅山鉱毒事件などを取り上げ、社会改良を目指し、明治四四年シーメンス事件では政府を鋭く攻撃している

22 資料⑦P-279 『三三年十二月二四日(略)岡部氏より青年団の件相談有之 今タクリス

マス會を開き信徒來集日向氏の謡曲有』

18 同 P-319 『三八年三月(日付欠)理想団青年より義塾継続賛成之件相談あり』

23 同 P-321

24 資料②P-89・90・91

25 資料②P-216・217

26 資料⑦P-322・323

27 同 P-326

28 資料⑫第二九号P-52

29 資料⑬第一一四号P-14

30 資料⑫第四四号P-32・33・34

《Ⅻ》 【安らぎを求めて】

〈小諸駅の出来事〉

熊二は此の時、義塾の終焉を以て、教育の世界から手を引き牧師としての活動に専念することを決意していた。

家族を小諸に残して長野市に向い、長野教会のスカッター宣教師(どの様な人物かは不明)の迎えを受けた。スカッターは長野講義所の主任宣教師として在籍していたが、熊二が長野に来ることが決まると、夫人の病氣治療の為に急遽上京したが、夫人が四月二四日死去。二五日の葬儀には熊二の一家も上京して参列している(1)

長野に移つても家族は小諸に残っていた為、小諸へ戻ることが多くなっていた。明治三九年五月十日も水明楼に泊まり、翌朝の列車で長野に向かった。

『十日 木曜日水明楼に滞在』『十一日金曜日 朝小諸町出発帰長 此日伊東東郷上村上將の上田町へ滞在なるを以て人民雑踏』と日記にあるが、日露戦争勝利から一年後に当たるこの時に、善光寺で戦没者の追悼供養を行う為政府関係者、陸海軍軍人が長野市に集まっていた。

『十五日 火曜日朝立川氏 乃木大将来長二付市中雑踏を極む(略)』これに参列するために東郷平八郎、伊東祐亭、上村彦之丞の三将官が十一日に列車で長野市を訪れた(2)

五月十一日朝、熊二が長野に向かった同じ小諸駅のプラットホームに、午後は千人近くの小諸尋常小学校の生徒が整列し、下り列車を迎えた。

僅わずかな停車時間であったが三人の将官が列車を降り、答礼の敬礼をした姿に生徒・引率の教師、観衆から万歳の声が上がった。

東郷元帥の姿に感激した佐藤寅太郎校長をはじめ教職員の中から、五月二七日の海軍記念日には何かをしたいという話が持ち上がった。

戦勝記念行事として、「国威発揚と国民訓練の連合運動会」を開こうという意見に纏り、場所を北佐久郡本牧村御牧ケ原の銭波沢(佐久市望月)と決定した。

明治三十九年五月二七日「第一回北佐久郡連運動会」を開催、大会は昭和十九年第三十九回まで続けられた。

参加校は、初回の十九校・四千人から 佐久郡全域に広がり、最盛期は六七校・一万四、四二四人が参加している。

第一回終了後の懇親会で東郷元帥に大会の成功を知らせる電報を打つと、東郷から「ゴドウケイノイタリ」と返電があり、全県に知られる大会となった。

この運動会の歴史は平成三十年佐久市立望月歴史民族資料館長、上原美次氏が「海軍記念日御牧ケ原大運動会の奇跡」と題した企画展示と、研究発表している(3)。

大会が数日の準備期間で成功した裏には、佐藤寅太郎の強したたかな計算があった。

長野師範学校卒の佐藤は前任の岩村田小をはじめ、佐久郡内の後輩の教師や、教えずで教師になった若者達との人脈形成していた。

県内には信濃教育会が明治十九年から組織されていたが、それとは別に日頃から佐藤の主唱による教育問題の研究会が開かれ、その運営はすべて会費制で行われ、この運動会も最初から教員、父兄、地域の青年団員の手弁当で行われていた。この

様な佐藤の姿勢は終始一貫していた。明治四四年から信濃教育会会長に就任、大正四年には国會議員(二期)に当選。この時は一週間足らずの選挙運動期間で当選という離れ業を演じているが、全て彼の人脈と人望のなせる業であった

藤村は熊二を評して「先生は播種であるが収穫者ではない」と語っているが、佐藤は小諸義塾を運営した熊二の教育の対する姿勢から、補助金や寄付金の怖さを学んでいたといえる。

前章の(最後の一文)にある、「一教育家」は特定されていないが、この文言が掲載された書籍は昭和十一年熊二のレリーフパネルの完成を祝して限定発行されている。

同時期に町立岩村田中学校の入口に、佐藤寅太郎の銅像を教え子達の募金で建てられ、全国でも四校しかない町立中学を設立した佐藤の遺徳を讃えている(4)

最後の一文は、町立中学として残れなかった小諸義塾に対する、卒業生からの慚愧の文面で 佐藤寅太郎に対する対抗心の表れともとれる

信越線の開通、小諸駅開業以来小諸町、北佐久の商業・文化の中心地となっていた。一方佐久郡の中心であった岩村田町は大正八年、現在の小海線の前身、佐久

鉄道が小諸・小海間に開通するまでは低迷し、爾来両町の対抗心は永く続いた。小海線の全通と国有化に尽力した国會議員の篠原和市(5)は小諸義塾卒業生である。

小諸駅が小海線の発着駅なり駅舎拡張の際義塾の校舎は撤去されている。明治三十九年五月の小諸駅での出来事は、熊二と佐藤、二人のその後の人生を象徴している。

〈長野伝道教会で活動〉

熊二が長野に移る一年前、明治三十八年三月、米国オランダ改革派外国伝導局のM・H・リッター博士とオルコット夫人、H・N・コップ議長が日露戦争中の国際情勢視察で日本を訪れ、二八日に長野市を表敬訪問している。

当時は日英同盟の締結もあり、米国に対する国民感情も友好的であったことから、親善行事として一行は県と市からの歓迎を受けた(6)。その時の熊二の日記には

『三十八年三月二八日 一家族長野市へ旅行 米国よりコップ博士、ハットン博士オルコット夫人来訪ニ付規矩美紀両人洗礼を受ける事ニ決ス ハットン博士は余か米中知己なるを以て同博士より受洗せしむ 城山館ニ於いて関知事の饗応あり 夜講義

所ニ聖餐三列ハットン博士の演説を通弁ス(略)』

『二九日 一番列車ニテ帰諸両博士小諸停車場ニ而分手』と記されている(7)

明治三十八年四月二日から熊二は毎週土・日曜、には長野講義所を訪れ仮教師として説教を行っていた。この時の熊二の伝導活動により、長野講義所の信徒は十五名も増加していた。

明治三十九年四月一日付で長野講義所第六代主任者となった熊二は、既に六一歳を迎えていた。熊二は米国オランダ改革派伝導局に働きかけ、長野講義所の教会用の土地取得に着手。旭町にあった借家から、県町七六番地(現在の教会所在地)の浅地

館という建物と土地を購入し移転させている(8)

牧師としての活動の他にも、報知新聞からの投書以来にも応じ、師範学校生に英語の指導なども始めていた(9)

明治四十年の正月は一家揃って小諸の水明楼で迎えた。

『一月一日水明楼にありて新年を迎ふ妻兒女とも健全にして神の恵を感謝す 朝輝 うららかにして四山雪なし氣候温和』(10)

長野との二重の生活は決して楽ではなく。学齢期に達していた長男(戸籍上は次男)は立川雲平の所に下宿させ、妻の隆は上田女学校の英語教師の職に就いていた。

この年の四月一日から熊二は横浜フェリス和英女学校へ二年間、教師として単身赴任した。是は希望して赴任したのか、日本基督教会と伝導局ミッションの話し合いによるものなのか不明で、在職時の熊二の日記は遺されていない。『フェリス和英学校60年史』には翌年四月に辞任したとされている(11)

〈大衆伝導(クルセード)と無教会主義〉

明治四十二年九月二十日から十一月十日まで長野市城山一带(約三万坪)を会場にして「一府十県(東京、神奈川、新潟、埼玉、群馬、千葉、茨城、栃木、山梨、愛知、長野)連合共進会」が開催された。

各県の殖産興業を目的とした博覧会で、特産品展示の他数々の催しが行われ、会場数は四十余を数え期間中、六十六万四千八百余人の観客を集め、長野駅の降客数が二十二万八千四百人という大盛況であった。

特異な催しとして、十月二六日から共進会場内の大会館で、長野市元善町仏都新報社主催の「神仏耶連合宗教大会」が行われた。

「仏教は勿論、神道も基督教も来て、まばゆき綾や金欄の袈裟法衣、衣冠束帯、フロックコートに袈裟、これも例のないまで珍しい」と報じられた。

曹洞宗の新井石禅師が座長となって「各宗教特有の教義教条を發揮すると共に協同一致の実を挙げ社会活動を期する事」と、四百人を超える宗教家が満場一致で決議している。午後の講演会で基督教界からは靈南坂教会の小崎弘道が「宗教と政治」と題して講演を行った。(『信濃毎日新聞』明治四一年十月二七日付第九三七八号)

此の出入を好機と捉えた、県下のプロテスタント四教派(浸礼、美以、聖公会、日本基督)は県庁前の空き地に間口四間、奥行き六間半の天幕(テント)を張り、十月一日から一教派が十日間ずつ、延べ四十日間に及ぶ大衆伝導(クルセード・十字軍の意)を開催した。

十月十五日朝七時半から祈祷会、十八日(日曜日)午前十時から、J・Hバラ宣教師の司式で聖餐会を行い、夜は各派合同で木村熊二牧師の説教が行われた(12)

外国伝導局ミッションの宣教開始で創立された日本基督教会は自主運営を目指す教会と、伝導局との間で協力の方法(伝導地の開始及び廃止、伝道者への報酬額、教会に補給する金額等)をめぐり永く紛糾していた。此の頃になると、外国伝導局ミッションの中枢である米国オランダ改革派と米国南長老教会は日本基督教会に対する協力体制から手を引く体制に傾いていた。熊二が一年間だけフェリスに赴任した経緯もこれに関連していると思われる。

明治四一年十二月、熊二と亡き妻鏡子が創立した明治女学校が二三年間の歴史を閉じた(13)。

創立以来、基督教の布教とは一線を隔した教育方針を貫いていたが、明治三年の私立学校令、三六年の専門学校令の発布以後は生徒数の減少などもあり、小諸義塾と同様に財政難に陥り閉校、在校生は新宿の精華高女に転校した。日本各地のミッションスクールが同じ様な苦境に立たされていた。

大正三年外国伝導局は日本での伝導活動方針を変更。外国伝導局は日本基督教会の総務局に吸収され、大正六年までは米国オランダ改革派アメリカンダッドリフトの管轄伝導地であった長野県内の教会は、日本基督教会の総務局に順次移譲されている。

北佐久郡軽井沢には夏季になると多くの外国人が避暑に訪れていた。彼らは安息日(日曜日)の礼拝の為に、明治四十年には国・教派を越えた礼拝堂、ユニオンチャーチを設立した。これは、今まで日本の基督教界で行われてきた外国人宣教師による宣教、伝導とは違った、大きな変化の表れであった。

明治四一年四月長野に戻った熊二は、上田でも伝導活動をしていたが嘗ての南北佐久地方でのような伝導活動は行えず、聖日礼拝と祈祷会を守り、教会員と交流

する日常であった。「人生五十年」と言われていた時代で六五歳を過ぎ、「光陰忽々
過るを病軀日々衰ふて如何とも為る能す」と感じていた。

熊二の日記は明治四三年七月七日〜十二月三十一日迄が遺されていない為此のこ
ろの様子はわかっていない。

明治四三年十二月十日発行の内村鑑三の主宰誌『青書之研究』(第一二六号、
四四年一月十日の第一二七号)に「めぐみの奇跡」と題した、熊二の基督教と教会に
対する想いと、この頃の心境が綴られている⁽¹⁴⁾

『敬愛する内村兄よ、曩者(先の日)は生(自分)が投書せしめぐみの奇跡は無教会主
義を反駁せしにはあらず、生はある点に於いては全く賛成を為すものなり(中略)
生の信ずる教会はかくの如く、又伝導もキリスト教を衆人に紹介するのありのみ、
ただ貧富貴賤の別なく心の中に靈火の燃えたる人々の集合する所、涙の谷間にさ
まよふて罪を悔める者の隠れ家とする場所さえあれば無教会主義にても教会に
ても満足し得らる也、愛兄幸に我を教えよ。

一月三日 内村愛兄 御坐下

蓮峰生』

〈手塚縫藏との出会い〉

連合共進会での大衆伝導(クルセード)は基督教を支持していた県内の教育者に勇氣
を与えた。

熊二が長野に来てから指導した、北信英語義塾で学んでいた手塚縫藏(註9参照)が
明治四四年三月から長野市後町小学校主席訓導として着任、長野伝道協会に復
籍した。手塚の活動は県下の基督教界だけでなく、信州教育の歴史にも大きな足
跡を残している。

熊二の提唱していた「人格主義教育」は、折からの大正デモクラシーの中で叫ば
れていた「教育は人である」という考えと共に、手塚によって信州教育の歴史に一つ
の流れが創られた。

手塚は大正二年諏訪郡玉川小校長に転任、東筑摩和田小校長就任後は松本で
「聖書研究会」を主宰し、小原福治をはじめ県下の教育界に多くの後継者を育ててい
る。

縫藏の妻千代は聖公会の伝導者牛山清四郎の娘であり、牛山雪鞋^{せつあひ}の筆名で信越
日日新聞、東信新報の論客として知られている。

長野市で大衆伝導(クルセード)が行われる直前の明治四一年五月小諸幼稚園が
開園された。

小諸幼稚園は上田保母伝習所の実習園の性格を持ってスタートした「小諸幼稚園
社員」と称した六人とメソジスト教会によって運営されていた。

この六人の社員は小諸義塾開設から有終館設立まで多額の寄付と支援活動をして
来た人達で、嶋田常蔵は親子二代にわたる信徒であった。

その後幼稚園は大正八年に一時休園したが、昭和五年に再開園している。

再開園に尽力したのは小諸幼稚園の卒業生達で、その後は第二次大戦中も閉園す
ることなく運営し、「学校法人信濃キリスト教学園小諸幼稚園」として現在も運営
されている⁽¹⁵⁾。

小諸義塾の開設直後に大手門校舎の二階に熊二の蔵書を貸し出したのが始まり
とされる小諸図書館は熊二の功績の一つであったが義塾閉鎖と共に消滅していた。

大正三年に小諸町内の青年会の拠出金により、小諸小学校内に義塾の蔵書を加
えて併設し運営された。何れも熊二の教育精神が小諸にも遺されていた証である。

明治四二年十二月長野県の調査によると県下には二十九の教会、講義所があり
小諸では、日本基督教会(長老派)の講義所では無く、メソジストの講義所が登録さ
れている⁽¹⁶⁾。

熊二が去った小諸には内村鑑三が再三訪れ小諸近郊の若者達と交流が続けられ、
無教会主義を貫いていた内村の信念は手塚をはじめ県下の基督教信徒に大きな影
響を与えた。

〈伝導局(ミッション)の方針転換〉

熊二の日記は大正元年と二年の記載が欠損している為、この間の熊二の生活と基
督教の状況を知ることはできない。

大正三年には長野市内のメソジスト、聖公会、日本基督教会の三教派が連携し、
活発な教会活動を展開していた。

だが中央の伝道局ミッションは長野伝導教会を日本基督教会に移譲する方針をすでに決めていた⁽¹⁷⁾。

『大正四年十一月十四日朝バリンストンより書状到達ス小諸伝導を依頼せらる』

長野教会は阿部贊平氏へ引き継ぐ事となりたり』

バリンストンは米国オランダ改革派伝導局から派遣された定住外国人宣教師で長野教区の責任者であったが、九月に東京に戻り熊二の後任に阿部氏を指名してきた。熊二は長野だけでなく上田でも活動していたが、小諸のオランダ改革派教会（講義所）は義塾の閉鎖により廃止されたままであった。

詳しい資料は遺されていないが大正四年に小諸町内の赤坂裏（小山久左衛門の持ち家）に家を一時借りていた。これは自宅としていた中棚の水明楼の修理で一時的であったのか、小諸に講義所を開設する目的で借りたのかは不明である。

『十二月十三日（略）全家南果町十番地へ移る』とあり、住いを教会内の牧師館から引き払ったと思われる。

『十二月十七日バラ氏之通報ニミッションの変動を申来り不都合之事情不少』とあることから、ミッション内部でも紛糾していたことがわかる。日記には『十二月三十一日俗事紛糾余裕なし（略）』と記している⁽¹⁸⁾。

伝導局からは小諸伝導の依頼を受けていたが、熊二がこの頃に小諸で活動した記録や資料は遺されていない。僅かに小諸幼稚園で開催された、内村鑑三の説教会の司会を務めた事と、高崎組合教会の牧師となっていた岡部太郎の説教会に同席したことが遺されているだけである⁽¹⁹⁾。

熊二が長野伝道協会ですら最後に行った説教と聖典礼は大正五年二月六日で三月二五日の日記に『東京の相談結果悪しく為めに計画を一変せざるを得ず』とある。

一家はとりあえず小諸中棚の水明楼に転居を決めたが、学年末で子供達の転校手續に苦慮していた様子が日記から窺える。

五月二日の日記には、『汽車にて隆出京ス停車場まで送る 前途茫々成敗を天に任せて下碑竹を相手ニ一男三女を養育する事となりたり水流花謝して人世之無常を模写し來漠々春愁を催す』

収入を得る為に隆子は三井家の家庭教師の職を得て単身で上京、伝導局の方針転換は熊二一家の生活を一変させた。

『大正五年七月二十日バラ氏来訪ミッションの決意を相談せらるる』熊二が最も信頼していた宣教師のJ・Hバラが急遽水明楼を訪れ内情を報告している。

それによると伝導局は三日間会議を開き信州伝導を放棄することに決定、これに反対したのは自分だけであったと語っている。

七月三十日に佐久の新旧教友に内村鑑三も加わり、上田教会でバラから報告を受けた伝導局の決議の模様と今後について話し合った。

八月十一日の記載は『ミッションより決議を申越ス漸々管係を絶ちて独立伝導に従事せん事の準備を為す（略）』とあり、その後約一年間、熊二は水明楼に居住して、上田を中心に単独で伝導活動を行っている⁽²⁰⁾。

大正六年日本基督牛込教会から、田島牧師外遊中の主任代行を依頼され、家族と共に九月二日、東京芝白金三光町に転居した。〈21〉

日本の基督教伝導局ミッションが伝導方針を余儀なくされた理由の一つに、それまでの内務省による基督教を含めた宗教行政を、新設の文部省宗教局に変更したことが挙げられる。

明治新政府の文部省が招聘した外国人教師の多くは基督教宣教師であったが、教育の世界では既に彼らの必要はなくなり、一部が英語教師として滞日しているのが現状であった。

大正二年に起きた海軍と外国商社による汚職事件である、「シーメンス事件」⁽²²⁾は日本在留の欧米人に衝撃を与え、多くの外国人宣教師が帰国したことで伝導局は活動方針を変更せざるを得なかった。

一部の国民は外国人に対して厳しい目を向け始め、維新直後から行き詰まっていた、皇道宣布運動が再燃する結果となった、その後の軍国主義の台頭に繋がる時代でもあった。

伝導局の方針転換はプロテスタントの信徒に大きな影響を与えた。特にロシア革命(1717年)前後は、日本人基督教指導者の一部に、社会主義に傾倒する現象が起きていた。

佐久移住以来、熊二の盟友であった立川雲平は、義塾閉塾の際弁護士として熊二の身分の保護に尽力衆議院議員にも三回当選していた。

明治四二年の屠場法改正疑獄で有罪となり失職。 弁護士資格も剥奪されたが村松介石²³に帰依し、其の後は基督教徒で医師の義弟、菊池音之助を頼り大正二年満州に渡り 大連では弁護士として邦人の保護に努め、大正十年には大連市議会議長を務めている²⁴。

牛込教会の前任者、田島進牧師が海外を目指したのと同様に、小諸義塾元教師の佐野寿が渡米したのもこの頃と思われる。

〈水明楼を安息の地として〉

大正六年九月の上京後は「在京日記」と表題した日記が遺されている。東京へ転居後は毎年の夏季は「帰園」と称して中棚の水明楼を訪れ「小諸日誌」と別書きされ、熊二の晩年を知る資料となっている。

東京芝白金三光町へ転居する一年前の大正五年九月二十日、義塾閉鎖後初めて女子学習舎の同窓会が開かれた。

『快晴(略)学習舎旧生徒相集りて中棚(会)し往時夢ン歩如きを話し将来を談し欣喜(略)薄暮散会』²⁵。(この時の写真は遺されている)

熊二一家が上京する三ヶ月ほど前の大正六年五月十三日島崎藤村は熊二の所を訪ねて来た『朝上田教会にて説教遠藤へ立ち寄り午餐 島崎春樹来訪不遇 夜雨』藤村はこの時四五歳、小説家として注目を浴びていたが、上京後は小諸で生まれた三人の女兒と、妻を相次いで失うという不幸に見舞われていた。この時は熊二と会うことが出来なかった。

その後、藤村は大正二年からフランスへ取材旅行をしたが第一次世界大戦の為、パリで足止めとなり、大正五年七月に帰国。早稲田大・慶応大フランス文学を講じている。

ペンネームは島崎藤村でも、七四歳の熊二にとっては、島崎春樹であった²⁶。

東京に移った熊二の所には、佐久へ移住する以前の友人、知人が訪れていた。十一月には明治女学校の校友会に参加、嘗て教鞭を執っていた明治学院の四十年記念会に招待されている。

小諸義塾の卒業生達は浅間会という同窓会を結成し、在京の卒業生が近況を知らせに訪れていた。

『大正七年十月二六日 土屋依田平野嶋田自動車二而築地西洋軒へ招待せらる諸氏より懇篤の談あり 今後毎月金四拾円寄付の由』この同窓会は以後も随時開かれ、『浅間会ヨリ招待せられ臨仙閣へ至る島崎三宅諸子来会せり』とある。

大正十年四月十六日には熊二の喜寿の祝賀会を開催している²⁷。

熊二の死去後に、浅間会の会員を中心に在郷の有志も加わり、熊二のレリーフパネルが懐古園に設置されたことはすでに述べてあるが、東京に移った熊二の浅間会からの生活支援は終生続けられた。

『小諸義塾と木村熊二先生』には「門弟名簿」と題して、故人も含めた卒業生の名簿が記載されている。

元々夏の暑さに弱い熊二は、七月になると小諸を訪れ、八月中、時には九月中旬まで過ごした。中棚の水明楼には旧知の人々が差し入れを持って訪れていた。熊二が佐久を訪れて最初に結婚式の司祭を務めた小野山嘉七郎からの支援は熊二が感謝する出来事であった。

佐久郡内で最初期に教会の置かれた春日村の敬虔な信徒であった小野山嘉七郎は、伝導局と交渉して、過去の熊二の実績に対して伝導局

から年金の支給を実現させている。

小諸義塾の評判を聞いて訪れ、塾長の熊二から島崎春樹を紹介された神津猛は、義塾閉鎖後も熊二と書簡を交わり、り毎年養育費として送金を続けていた。

教え子の一人、小諸町内で歯科医を開業した林幸一は擬歯の治療費は取らず、毎年夏に熊二が小諸を訪れる事を楽しみにしていたと林家の遺族が語っている。

(林家は代々小諸藩典医で幸一が歯科医を開業、小諸幼稚園の支援者で既に高齢ではあったが筆者も幸一の治療を受けた記憶がある)

再開された小諸図書館に熊二が蔵書を寄贈したのも此の頃である。²⁸

上京後の日記には日曜日の礼拝に牛込教会を訪れたこと以外に、基督教関係者との交流の記載はなく、三人の男児と三人の女児の成長の様子が記されている。

そこから見えるのは、気負いも銜てらもない木村熊二の姿である。

〈家族と共に〉

基督教の教義の中でカトリック(旧教)とプロテスタント(新教)の違いに、神に奉仕する人間(司祭者、牧師又は神父)の異性と接する行為(妻帯)の解釈には違いがあり、特にカトリックの中には厳密にこれを守る教派も存在する。大正八年十月十四日、熊二と隆子は七人目の命を授かっている。

『十四日 晴午前十字半てん女児を与らるる母子健全神の恵みを感謝セざるを得ず

七十五の労翁にして一歳の児ありまためずらしき事ならずや(略)』

しかし『美都』と命名された女児はそれから一ヶ月余で亡くなっている。日記には『十一月十七日 美都肺炎二罹りたる由医師申聞る病大二進み午前八時三十分遂に永眠す老後の愛児二別る悲歎を慰するに由なし(略)』と記されている。

悲嘆にくれる両親を心配し、翌日『信秀規矩之三児相計り美都を天王寺墓地へ埋葬ス 大雨終日 夜来孤寂無卿美都の顔容(また眼中二消滅せず(略)』K29。

長男(戸籍上は次男)信児と次男の秀三はすでに自立の道を歩み始め、家族が強い絆で結ばれていたことを日記から知ることが出来る。

七七歳という老境に入った熊二の許には維新前後の熊二を知る友人知人の訃報が多く届くようになっていた。

佐久前山村で前妻花の慣れない田舎暮らしの面倒を引き受けてくれた敬虔な信徒、早川権弥が大正十年八月この世を去っている。大正十一年七月には乙事太郎乙(が八十歳の天寿を全うした。幕臣時代に熊二と知り合い、米國留学中は木村家の面倒を見てくれた畏友との別れであった。

出生後から両親の愛情を受ける機会に恵まれず、幼少期を孤独に過ごした熊二が、家族と共に生活する喜びを味わう事ができたのは、皮肉にも、神への奉仕から退く時期であった。熊二は家族と共に過こせることを神に感謝していた。

熊二の心に残る家庭と家族の姿はミシガンのハーランドで出会ったヘルプス一家であった。だが、夫の帰国を心待ちにしていた妻鏡子との生活は僅な期間で崩壊し、長男祐吉の死、後妻の花との離縁という無残な結果となつてしまった。

熊二が自身の半生をどんな言葉で六人の子供たちに伝えたのかはわからないが、後年の日記からは家族が肩を寄せ合つて生活している様子が垣間見られる。

大正十一年九月一三日に軽井沢の星野温泉に内村鑑三を訪ねている。

子供達は新学期の準備で先に帰京していたが、敢えて小諸滞在を日延べしての訪問であつたK30。

神の道について問われれば答えるが、自ら出向く事もあまりなくなり。往時を語り未来に向けた話の出来る相手は少なくなつていた熊二にとつて、内村の存在は大きかつた。

内村が主宰する『聖書之研究』には依頼に応じて、神への思いを投稿していた。

隆子は頌栄女学校の教師として勤務が決まり、東京での生活も安定して来たことが伺われる。

大正十二年一月元旦の日記には『全家健全にして新年を迎ふる得たりこれ神の深き御恵と感謝して已ます』とあるK31。

熊二の年齢は七九歳となり時々体調を崩すことが多くなつた日記にも『終日卧床』あるいは『病勢昨日二同じ在床』とある。

『四月三日 小山周次君來訪浅間会より見舞いを贈らる』『四月四日小山君再び來訪病床に接す』K32とあり、病身の様子が記されている。

この年も七月には小諸行きを計画していたが、六月に体調を崩したことから延期となり、七月二一日になつて次女と次男が付き添つて水明楼を訪れた。

滞在中の八月二三日に再び体調を崩し旧友の田村医師の診察を受けていたことから例年であれば八月末には家族と共に帰京していたが、二九日に次男だけが帰京、熊二の帰京はしばらく延期と決めていたが、この延期が家族を災難から救うという結果となつた。

『大正十二年九月一日午後十二時半大地震ありたり』。東京の自宅には隆子と三男、長女、三女がいたが、帰京した次男と家族に被害がないことが判明したのは十一日なつてからで、自宅も倒壊を免れ一家は將に命拾いをしていくK33。

熊二が東京に戻つたのは十月二二日であつた。

慢性の胃腸炎を患っていた熊二は体力の衰えもあり、外出も儘ならなくなっていたが、翌年の大正十三年の夏も短期間であったが水明楼を訪れている。

『七月廿三日子供達相生町之夜市へ行く略』。〔34〕

熊二が訪れるのを待っていた旧知の人々は体調を心配し、卒業生の武重医師も訪れて来たが、市内へ出かけることもなく、終日水明楼で過ごし続けた。

九月三日に帰京したが、その後の日記の内容はまるで闘病日誌のようで病状は一進一退を繰り返していた。

大正十四年の夏は小諸行きを断念し治療に専念した様子が記されている。

『大正十五年九月一日病之少しくおこたる時小諸行ヲ図企ヌ 九月十日之記事ハ他帳ニあり』〔35〕

これ以後の記載は遺されていないことから、この年の夏の小諸訪問が最後であったと思われる。

「耳はろうすいといえども、国を思い基督教を愛する情においては純武士」と内村鑑三がその様子を自分の日記に記している。

昭和二年二月二八日家族に看取られ、神の招きに応じて自宅で永眠、享年83歳。三月五日、牛込教会で葬送。

弔辞は義塾卒業生の平野英一郎と内村鑑三が述べている。

十二年に渡る留学からの帰国を心待ちにしていた、鑑三に寄り添うように谷中霊園に埋葬されている

〈了〉

【註】

1 資料⑦P-326・327・328

2 同 P-328・329

三人の将官は上田町では明治維新で非業の死を遂げた、上田藩士赤松小三郎の墓参りを行い、伊東元帥は神戸海軍伝習所で坂本龍馬から指導を受けていたことから亡き竜馬を知る、三吉慎蔵の長男米熊（小泉蚕業学校校長）と歓談している。

『赤松小三郎ともう一つの明治維新』参照

3 『海軍記念日御牧ヶ原大運動会沿革誌』によるとこの運動会を開催する以前、明治三二年川西地区の小学校が御牧ヶ原で合同運動会を開催、観客合わせて三千余人と信濃毎日新聞が報じている。当初はこの会場（場所は特定されていない）を使用する予定であったが、二五日の下見で会場を現在の佐久市春日温泉「みどりの村」付近の仙波沢に急遽変更し、夜までかけて会場を設営、作業は佐藤の教え子や地元青年団の若者たちが道具を持ち寄り手弁当で行った。昭和十年第三十回を記念し、高さ約十三Mのコンクリート製の記念碑を建て、額面には『皇威耀八紘 海軍大将伯爵 東郷平八郎』と東郷揮毫の会旗文字複写、側面には『皇紀二千五百九拾五年佐久教育会』と文字盤にある。記念碑は現在も大会の会場であった場所に遺されている。

4 資料⑨『佐久の代議士』P-143

5 篠原和市（しのはらわいち） 明治14年〜昭和5年 南佐久郡岸野村篠原代吉の3男
小諸義塾卒業後、日本大学法科を経て、大阪毎日新聞・東京日日新聞記者を務める。
清浦圭吾内閣で司法大臣秘書官を務める。

大正14年岡部次郎の死去により、長野9区補欠選で国会議員（政友会）当選、

小海線全通に尽力する。3期目当選を果たしたが昭和五年現職のまま死去。享年49歳

6 資料⑧P-66・67

7 資料⑦P-320

8 資料⑧P-72・76〜78

教会堂の移転は三十九年十二月二四日とされているが熊二の日記には記載されていない。

9 資料⑦P-328

北信英語義塾と呼ばれ、山路愛が創設、長野講義所の外国人宣教師から指導を受けていた英語塾。牛山雪鞋、杉本栄太郎、手塚縫蔵*等が学んでいる。

*手塚縫藏(てずかぬいぞう)明治十二年(昭和二九年)東筑摩郡広丘村農由蔵の長男

明治三二年長野師範学校入学後、山路愛山から基督教に導かれ入信、穂高町井口喜源治の研成義塾、小諸義塾の島崎藤村を訪ねている。三五年卒業後東筑摩郡和田小学校訓導

となり大田水穂、島木赤彦等と交流、人格の自由を重んずる教育を目指す。

大正二年諏訪郡玉川小学校長に転任するまで熊二の僚友として伝導に協力。

大正八年県下の各教派を纏めて、雑誌『基督者』を創刊、信州教育の歴史の中に基督教徒としての独自の流れを作っている。

10. 資料⑦ P-3335 33 同 P-480・481

11. 資料⑧ P-86・87 34 同 P-479

12. 同 P-88~92 35 同 P-521

13. 資料③ P-8336~8338 33 同 P-485

14. 資料⑧ P-98 34 同 P-479

15. 資料③ P-25・26 『小諸教会百年史』日本基督教団小諸教会 32 同 P-480・481

16. 資料② P-902 33 同 P-485

17. 同 P-106 34 同 P-479

18. 資料⑦ P-380~382 35 同 P-521

19. 資料③ P-340 34 同 P-479

20. 資料⑦ P-387~393・406 35 同 P-521

21. 資料⑧ P-115 34 同 P-479

22. 「シーメンス事件」ドイツのシーメンス社と鉄鋼メーカーのブイツカーズ社による日本海軍高官への贈賄事件巡洋艦発注に纏わる贈賄も絡み当時の政界をも巻き込む一大疑獄事件。

大正三年一月に発覚し国会では嶋田三郎の追求を受け同年二月、海軍長老の山本権兵衛内閣が総辞職に追い込まれた。

23. 村松介石(むらまつかいせき) 安政六年(一八五九)~昭和十四年 播磨明石藩士

東京一致神学校で学び、米国オランダ改革派から独立した日本のプロテスタント系新宗教の指導者で一心会を立ち上げる。植村正久、田村直臣、内村鑑三と共にキリスト教界の四村と呼ばれている

24. 資料② P-243・244 34 同 P-479

25. 資料⑦ P-33992・3394 35 同 P-521

26. 同 P-402 34 同 P-479